

平成 28 年度 社会貢献・地域連携活動報告書



東 北 福 祉 大 学

目 次

ボランティア学習による 21 世紀型市民の育成	ボランティア支援課	・・・	1
平成 28 年度 生涯学習支援室の活動	生涯学習支援室	・・・	5
地域共創推進室の実践活動	地域共創推進室	・・・	10
乳児期から学童期を中心とした子育て・子育て支援、発達支援事業	次世代育成支援室	・・・	16
「予防福祉」の普及・啓発と生涯現役社会の実現に向けた取り組み	予防福祉健康増進推進室	・・・	21
鉄道交流ステーションの活動	鉄道交流ステーション	・・・	25
認知症の方が尊厳を持って暮らせる実践的取り組み	認知症予防対策研究室	・・・	29
次世代を担う学生防災士による防災啓蒙教育活動	防災士研修室	・・・	32
平成 28 年度 地域福祉研究室の活動	地域福祉研究室	・・・	38
子ども支援プロジェクト	子ども支援プロジェクト推進委員会	・・・	40

タイトル： ボランティア学習による 21 世紀型市民の育成

部署名： 学生生活支援センター ボランティア支援課

I. 設置背景と目的

平成 10 年にボランティア支援課を設立し、全学生に対するボランティアガイダンスやボランティア活動の単位化「福祉ボランティア活動Ⅰ～Ⅳ（平成 5 年）」などを通しボランティア精神の高揚を図っています。また、阪神淡路大震災をきっかけに各地で発生した災害支援ボランティアについても取り組んでいます。

本事業の全体の目的は、ボランティア活動・学習による教育的効果をより一層高め、本学の教育理念である「行学一如」に基づく「理論と実践」、「知識と技術」の融合を図り、教育目的である「福祉社会を担う人材」の養成に資することです。それは「ボランティア学習による 21 世紀型市民の育成」について、ボランティア活動・学習による教育的効果を高めるとともに、学生の社会参加・参画型学習のより一層の充実・発展を図ることでもあります。

II. 活動概要

上記の理念・目的の達成のため、H28 年度は下記の事業を実施しました。

【平成 28 年度 学生生活支援センター ボランティア支援課 事業一覧】

- (1) ボランティアコーディネート業務
- (2) TKK（東北福祉大学・工学院大学・神戸学院大学）3 大学連携事業
- (3) 災害復興支援ボランティア（東日本大震災、平成 28 年熊本地震、平成 28 年台風 10 号豪雨水害）
- (4) 「福祉ボランティア活動Ⅰ～Ⅳ」、「ボランティア活動論」、「地域減災論Ⅰ」、「地域減災論Ⅱ」、「環境ボランティア論」、「社会貢献学入門」の開講
- (5) 全国高等学校及び小中学校修学旅行 減災・防災教育体験プログラムの実施
- (6) 減災・防災教育事業の実施
- (7) 社会貢献学会の運営 など

III. 活動内容（H28 年度）

(1) ボランティアコーディネート業務

ボランティア依頼の受付・紹介、相談支援、学生ボランティア・サークルとの協働、ボランティア・市民活動に関する情報提供、地域社会との連携協働、講座・研修会の企画・実施しています。地域や団体・施設からのボランティアの依頼受付や学生や地域の方々へボランティア情報を発信し、活動者と依頼者とのコーディネートを図るものです。

【総数】ボランティア依頼件数：349 件（平成 27 年度 307 件）、活動者数：2,194 名（平成 27 年度 2,203 名）

※平成 29 年 3 月 31 日現在、学内ボランティア系サークルの活動は含みません。

(2) TKK（東北福祉大学・工学院大学・神戸学院大学）3 大学連携事業

本取組は、3 大学が連携し、各々の大学の特色、強みを活かしつつ文系と理系の融合によって高度な社会貢献に関する研究・教育を行うとともに、より効果的・効率的な安定した大学経営を実現させることで社会に貢献することを目的とし推進しています。

具体的には、防災・減災や社会環境及びボランティアに関する高度かつ実践的教育のための大学間連携とする

ため、専門教育課程としての「学び合い」、課外活動としての「分かち合い」、災害時に備えた実践訓練とバックアップシステムとしての「助け合い」を展開し、これにより学士力向上を実現させ、同時に各大学の活性化・危機管理能力の向上を目指します。さらに、大学が広域の地域間ネットワークの核として機能することで、国家レベルでの危機管理のための人的資源の育成につなげていきます。なお、この連携は、宮城県、東京都、兵庫県、仙台市、新宿区、八王子市、神戸市や国際防災研修センター等の協力関係の基に推進しています。

【社会貢献活動支援士コース】

取得希望者数（1～4 学年総数）：89 名、科目数（本学・神戸学院大・工学院大も含む）：18 科目

第 6 回資格認定試験：平成 29 年 2 月 25 日（土） 合格者数：12 名

【TKK 関連事業】

○TKK3 大学合同 山元町被災地域支援ボランティアの実施

活動日：平成 28 年 9 月 1 日（木） 参加者：21 名

○神戸学院大学主催 宮城と神戸の大学生が交流する「神戸招へいプログラム」

開催：平成 28 年 10 月 8 日（土）～10 日（月） 参加者：本学 2 名

○工学院大学 地震防災訓練への参加

実施：平成 28 年 11 月 24 日（木） 参加者：本学 20 名

○神戸学院大学・社会貢献学会共催 第 7 回防災・社会貢献ディベート大会へ参加

論題：『わが国は歴史的建造物の防災・復興対策を最優先すべきである』

開催：平成 29 年 2 月 18 日（土）

結果：本学から 1 組 4 名が出場し、立論賞を受賞し、優秀な成績をおさめました。

○国交省・東京都 防災教育施設『そなエリア東京』春の防災教育イベントにて本学ポスター出展及び現地 TKK ワークショップ及び上野学園大学連携コンサートの開催

- ・ポスターブースを出展：平成 29 年 3 月 1 日（水）～20 日（月）
- ・現地ワークショップ及びコンサートの開催：平成 29 年 3 月 4 日（土）～5 日（日）
- ・参加者：子ども・来場者合計：合計：342 名（12 日：75 名、13 日：267 名）



東日本大震災で被災した山元町の新市街地「つばめの杜地区」で住民と 3 大学で協働した清掃活動を実施。



そなエリア東京にて TKK3 大学ブースを設け、来場した子どもや修学旅行生へ減災防災教育を実施。

(3) 災害復興支援ボランティア（東日本大震災、平成 28 年熊本地震、平成 28 年台風 10 号豪雨水害）

本学の避難所を閉鎖後、学生は自宅待機となったが、「東北福祉大学ボランティア会」を設置し、各地で災害ボランティア活動を実施しています。また、平成 28 年度に発生した「平成 28 年熊本地震」では、熊本県益城町の避難所へ、本学医療バスを貸し出しし、医療相談や着替え、授乳スペース等を設けています。その他にも学内や仙台市内の街頭にて義援金募金活動を実施し、熊本県社会福祉協議会を通じて、1,305,610 円を寄付しています。

●東日本大震災関連：92 活動（16 市町村）、震災時より延べ 6,017 名（昨年度 5,950 名・平成 29 年 3 月 31 日現在）

- ・上野学園大学連携事業「復興コンサート」の実施

日時：平成 28 年 8 月 9 日（火）～11 日（木）

活動場所：名取市美田園第 1 仮設団地（集会所）、特別養護老人ホーム「うらやす」

参加学生：上野学園大学 6 名、本学学生サークル「ふぁみりあ」14 名

本学アカペラサークル「MUSICOM」13 名、匠民 10 名、教職員指導者 4 名

●平成 28 年熊本地震

- ・熊本県益城町避難所支援（医療バスの貸し出し）

期間：平成 28 年 4 月 23 日（土）～5 月 28 日（土）

- ・義援金募金

期間：平成 28 年 4 月 18 日（月）～ 5 月 13 日（金）

募金額：1,305,610 円 ※熊本県社会福祉協議会へ寄託



仮設住宅にて 2 大学協働の復興応援コンサートを実施。

●平成 28 年台風 10 号豪雨水害 泥かき・瓦礫撤去

場所：岩手県岩泉町

期間：平成 28 年 11 月 12 日（土）～13 日（日）

活動者：25 名



熊本地震義援金募金活動を街頭で 2 日間実施。

(4)「福祉ボランティア活動Ⅰ～Ⅳ(通年 1 単位)」、「ボランティア活動論(前期 2 単位)」、「地域減災論Ⅰ(前期 2 単位)」、「地域減災論Ⅱ(後期 2 単位)」、「環境ボランティア論(後期 2 単位)」、「社会貢献学入門(前期 2 単位)」の開講

ボランティア活動の単位化や各種ボランティア及び減災、環境をテーマにオムニバス形式の講義を実施しています。また、TKK 3 大学連携プロジェクトの一環として開講する共通の授業科目であり、担当教員が各々の専門分野に関する授業を行っています。神戸学院大学は人文・社会学分野から防災やボランティア、国際協力に関する地域貢献のための教育を、工学院大学は工学分野から防災・環境問題を捉え、地理情報システム (GIS)などを駆使した災害時の緊急対応訓練や地域と連携した実践的な教育を、本学は福祉の分野からボランティア教育を中心とした減災教育を紹介しました。

(5) 全国高等学校及び小中学校修学旅行 減災・防災教育体験プログラムの実施

全国の高等学校及び小中学校では、宮城県を訪ねて、東日本大震災の被災地見学を希望することが多く、また、被災地でボランティア活動をしたいという希望が多くありましたが、現状ではボランティア活動をする場所が減少し、魅力の低下もあって観光地離れが進んでいます。

被災地で体験活動や現地での交流を希望する学校も多く、『みやぎ観光復興支援センター』との共同で、全国の小・中・高等学校生向けに防災教育の実施を本年度から開始しました。

- ・福岡県小倉高等学校（生徒 68 名）

日時：平成 29 年 1 月 20 日（金）

場所：東北福祉大学 けやきホール

(6) 減災・防災教育事業の実施

宮城県内外各所で子どもや地域向けに、学生が主となって、本学オリジナルの減災・防災教育のプログラムを

用いて開催しています（平成 28 年度：13 か所）。また、茨城県高萩市と栃木県さくら市と「防災・減災及び大規模災害における相互支援に関する協定」を結び、小学校にて防災教育を行いました。運営にあたっては、中学生や高校生、地域住民、社会福祉協議会などからもボランティアとしての協力を得て、実施しています。

- 実施内容：エコマークス症候群予防体操、非常食作成、減災クイズ、減災カルタ、AED 体験、煙体験、消防車両見学、避難行動要支援者訓練（車椅子レース）、非常持ち出し品借り物競走、減災クイズ等）
- 宮城県内実施場所：大崎市大滝地域、名取市不二ヶ丘小学校、栗原市立志波姫小学校、松島町立松島中学校、仙台市若林区消防署、鶴ヶ谷中学校、仙台市福住町防災訓練、利府町青山地区防災訓練 等
- 宮城県外実施場所：茨城県高萩市立東小学校、栃木県さくら市立南小学校



小・中学校にて楽しみながら学べる減災防災教育を実施し学びを深めています。



地域の防災訓練にて減災防災教育ブースを設け、子どもや市民向けにプログラムを実施しています。



宮城県に修学旅行で来た、小・中・高校生へ、学生主体の防災教育体験プログラムを開始しました。

(7)社会貢献学会の運営

社会貢献学会は、社会貢献学の研究の向上と発展につとめ、研究に基づいて教育や普及活動を実践し、市民とともに活動することでその成果を社会へ還元することを目的としています。本学会では、社会貢献、防災・減災、ボランティア、福祉、環境等の専門知識を身につけた「社会貢献活動支援士」の資格認定を行なうとともに、平時には専門知識と能力を生かし、災害発生時など緊急事態が生じたときにも、防災・減災等の知識やスキル、ネットワークを活かせるための環境づくりの場として運営及び学会大会開催を行っています。

テーマ：第 7 回社会貢献学会「Design & BOSAI ～社会に貢献する人、街のあり方～」

日時：平成 28 年 12 月 9 日（日） 場所：工学院大学 新宿キャンパス

IV. 今後の展望

地域に根ざす大学の社会貢献において、ボランティア学習による人材の育成や市民社会の創造に向けた各種取組が多く実施されています。平成 28 年度は全国的に多くの災害に見舞われた年でした。本学の災害ボランティアとしては、平成 7 年の阪神淡路大震災より被災地において災害ボランティア活動を実施し、そこから「学び」や「気づき」を得られています。それに加え、市民と協働した「減災・防災教育」を現在も実施しており、地域の減災・防災力が向上するとともに、学生が現地での活動や事前学習等により自助力やプレゼンテーション能力の向上を図れる事業となっています。

大学の専門性を生かした社会貢献や学生の人間的成長を目指し、学生による小・中・高校生へのボランティア学習プログラム実施の指導や産学官民と連携・協働体制及びネットワークの構築により事業の強化、地域活性化やまちづくりを担う人材の育成等地域に即した活動を今後も実施していきます。

タイトル：平成 28 年度 生涯学習支援室の活動

部署名：社会貢献・地域連携センター 生涯学習支援室

I. 設置背景と目的

生涯教育の考え方は、昭和 40 年、ユネスコの成人教育推進国際委員会に於いてポール・ラングランが提唱した『教育を従来のように成人になるための準備としてとらえる考え方を改めて、人間の可能性を導き出す生涯を通じての活動としてとらえる「永続的教育」』の概念に始まると言われています。我が国では、昭和 41 年、中央教育審議会が「学校中心の教育観にとらわれて社会の諸領域における一生を通じての教育という観点を見失ったり、学歴という形式的な資格を偏重したりすることをやめなければならない」と述べ、昭和 46 年「生涯教育の観点から全教育体系を総合的に整備」すべきと指摘し、昭和 56 年「生涯教育について」答申するに至りました。この答申では、生涯教育の観点から、家庭教育、学校教育及び社会教育の各分野を横断して教育を総合的にとらえ、家庭教育の充実、初等中等教育における生涯教育の観点の重視、高等教育における成人の受入れ、社会教育の推進等教育諸機能全般にわたって提案しました。これらの答申を受け、平成 2 年「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律」が制定されました。

この法律は、1) 生涯学習の振興に資する都道府県の事業、2) 地域生涯学習振興基本構想、3) 生涯学習審議会等、という三つの施策が盛り込まれました。

本学では、平成 4 年から「みやぎ県民大学」を開講し、平成 5 年には生涯学習センターを設置、公開講座を中心とした開かれた大学を目指した取り組みをスタートさせました。

平成 11 年度には「生涯学習センター年報」を創刊し、開かれた大学づくりのための調査・研究活動にも取り組みを開始し、また、大学独自の公開講座や仙台市から委託されたリカレント講座など少しずつ事業を拡大しつつ、出張講座や各地で開催される学習会・研修の支援も行ってきました。平成 10 年に社会人聴講生を受け入れ、平成 21 年に履修証明社会人コースを制度化し、以来、市民の幅広い学習ニーズに応えることを目的として事業を行っています。

平成 22 年 4 月の組織改編により、社会貢献・地域連携センター 生涯学習支援室に改称して、これまで通り生涯学習に関する事業に取り組んでいます。

II. 活動概要

本学の生涯学習支援室は、市民のための公開講座の開催、職業人の再教育講座の開催、社会人聴講生の受け入れ、履修証明社会人の受け入れを主な業務としています。

III. 活動内容（H28年度）

1. 公開講座

平成 28 年度は下記の 4 つの公開講座を開催しました。また、本学の仏教専修科の協力を得て毎週土曜日の午前、ウィークエンド坐禅会を開催しました。

（1）東北福祉大学公開講座「感性心理学から日本人の心を考える」

講師 東北福祉大学名誉教授 小松 紘先生

会場 東北福祉大学ステーションキャンパス 3 階 S301 教室

受講者数 19 名

【開催日及びテーマ】

① 8月3日(水) 開講式 オリエンテーション

「感性」とは何か 「感性」の意味。外国語での表現。知・情・意の中での位置づけ。

② 8月10日(水)

乳・幼児期の子供の心と環境 知・情・意の芽生えと「豊かな環境」の効果。「貧しい環境」として「野生児」の例。「人となる」ということ。

③ 8月24日(水)

児童期から思春期へ 人を思う心、「初恋」、芸術やスポーツなどの「感動」体験による「感性」の飛躍的成長。「過ち」と親の言葉。現代の“親子関係”に見る「感性」。

④ 8月31日(水)

「大人」とは何か 「成人」の人格構造の多様性。仕事・人間関係などから社会的役割にたいする「社会的感性」の充実。

⑤ 9月7日(水)

老年期の心 自分の人生をどう「収める」か。老後に何を求めるか。後生に何を残すか。「死」にたいする「感性」と「死」のあり方。

閉講式

【この講座の趣旨】

「感性」をどう定義するかは異論の多いところですが、「感性」といわれる心の働きは、私たちの人格の基盤を形成し、行動の独自性を決定する重要な要因の一つと考えられます。この「感性」は、個人の遺伝的素質をもとに、文化のように先人から伝えられた精神的糧を栄養として、環境の影響を受けながらその人の個性を形成していくものといえます。

本講座では、人間の成長・発達の中で、感性の開花を促し、人との豊かさと奥深さを育成していく環境条件の検討を行い、さらに日本人固有の感性を創成した要因を、我が国独自の文化の中に求めてみたいと思います。



講座(1) 感性心理学から日本人の心を考える

(2) 平成28年度みやぎ県民大学開放講座「道元禅師の生涯」

講師 東北福祉大学 学長 大谷 哲夫先生

会場 東北福祉大学仙台駅東口キャンパス5階 53教室

受講者数 126名

【開催日及びテーマ】

① 9月1日(木)

開講式、オリエンテーション

映画 「禅」 前編、解説

② 9月3日(木)

映画 「禅」 後編、解説

③ 9月15日(木)

くほう
求法の旅 ①出生・出家・入宋に至るまで



講座(2) 道元禅師の生涯

④ 9月29日(木)

求法^{ぐほう}の旅 ②入宋・身心脱落・帰国後の展開

⑤ 10月6日(木)

はてしなき 求道^{きゅうどう}の旅路・まとめ

閉講式

【この講座の趣旨】

鎌倉新仏教の一つである曹洞宗の創始者・道元禅師の名はよく知られていますが、その生涯については一般にはあまり知られていません。しかし、鎌倉時代の閉塞感が新仏教を生み出したとすれば、道元禅師の生き方が、同じく混沌とした現代に生きる私たちに新たな示唆を与えてくれるはずです。

この講座では、有名な著書「正法眼蔵」、中国留学記である「宝慶記」、弟子たちが編纂した語録「永平広録」などを紹介しながら道元禅師の生涯をたどり、師の生き方・教えをわかりやすく紹介します。講師は、本学学長で道元研究の第一人者大谷哲夫先生です。

(3) 東北福祉大学公開講座「古文書の解読法(初級～中級編)」

講師 岩手大学名誉教授(元東北福祉大学教授) 細井 計先生

会場 東北福祉大学ステーションキャンパス3階 S301 教室

受講者数 64名

【開催日及びテーマ】

① 9月2日(金) 開講式、オリエンテーション
女大学

② 9月9日(金)
伊達政宗朱印状(天正15年、1587)、
伊達政宗判物(天正16年)、老中奉書(安政5年、1858)、
寛政8年(1796)『雑書』(盛岡藩家老席日記)

③ 9月16日(金)
幕法『御当家令条』、寛文6年(1666)御勘定所下知令

④ 9月23日(金)
藩法『御家被仰出』、寛永元年(1624)、正保2年(1645)、
慶安2年(1649)、同4年、同5年、承応3年(1654)

⑤ 9月30日(金)
藩法『刑罰』、寛永21年(1644)、寛文元年(1661)、延宝5年(1677)、同6年、同8年
閉講式



講座(3) 古文書の解読法(初級～中級編)

【この講座の趣旨】

本講座では、古文書、とりわけ江戸時代の古文書の解読演習を重点的に、かつ丁寧に行うことにいたします。

まず最初に、典型的な書体である御家流で書かれた簡単な文書から読み始め、慣れるにつれて少しばかり難しい分野へと進みますが、初心者でも十分対応できるように配慮し、古文書の読解力アップを目指します。そして江戸時代の古文書の解読を通して、当時の生活の在り方などを学びたいと思います。

学習を通して、誰もが古文書に親しみ、かつ解読に興味を持つようになって戴ければと念じています。

(4) 産学連携プロジェクト リカレント講座

「高齢者の生活を支える車椅子適合支援講習会ー正しい車椅子選定・調整のための基礎から実践まで」

講師 東北福祉大学教授 関川 伸哉先生

会場 東北福祉大学国見キャンパス 3号館 3階 323 教室、3号館 1階介護実習室

受講者数 12名

【開催日及びテーマ】

10月8日(土) 9:00~18:00

開講式 オリエンテーション

1. 車椅子適合支援について(考え方・必要性・方法)【講義】
2. 車椅子選定のポイント(使用目的・機能・トレードオフ等の整理)【講義】
3. 利用者評価と姿勢の確認【講義&実習】
4. 身体寸法計測と適合値の算出【実習】
5. 車体の選定(カタログ等をもとに現状の車椅子についての確認)【実習】
6. 車体の調整と適合ー1【実習】
7. 車体の調整と適合ー2【実習】
8. クッションについて(体圧とアンカー機能を踏まえた特徴と選定のポイント)【実習】
9. クッションと体圧【実習】
10. 多機能型車椅子の特徴と体圧の変化【実習】
11. まとめ及び質疑応答(アンケート実施)

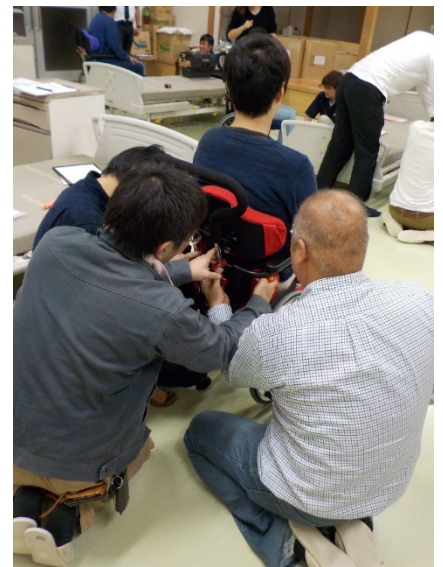
閉講式

【本講座の趣旨】

今年度のリカレント講座は、高齢者介護に関わるテーマで産学連携プロジェクトとして実施します。

近年、高齢者介護に関わる多職種連携を考える上で、福祉用具専門相談員及び福祉用具に関わる事業所の方々との連携は重要であり、利用者やケアマネージャーから専門的視点の相談を求められることも多いです。

そこで今年度は、株式会社ジェー・シー・アイとの連携により、車椅子適合支援の講座を企画いたしました。この機会に、講義プラス実習体験できるスキルアップ研修講座へ是非ご参加ください。



講座(4) 高齢者の生活を支える車椅子適合支援講習会

(5) その他

ウィークエンド坐禅会へのお誘い

共 催：仏教専修科、生涯学習支援室

日 時：4月23日(土)～12月17日(土)

会 場：坐禅堂 法堂

講 師：本学仏教専修科 講師 半崎 義則先生ほか

2. 社会人聴講生の受け入れ

平成28年度は22名の社会人聴講生を受け入れ、延べ30科目の授業を学部生と一緒に受けていただきました。

3. 履修証明社会人コース

平成 28 年度は、異文化コミュニケーションコース 2 名（うち修了者 1 名）の社会人学生を受け入れました。

4. 学生支援

福祉用具専門相談員の資格を希望する 13 名の学生に、必要な支援を行い、13 名が無事に単位取得しました。

IV. 今後の展望

学習者の視点に立ち「生涯教育」は「生涯学習」と表現されるようになって 30 年が経過しました。本学の公開講座が、地域の皆様が学習する機会として重要な役割を担っていることを自覚し、今後も本学の得意とする分野や市民のニーズに対応したテーマを探究し、公開講座を企画して参ります。

タイトル： 地域共創推進室の実践活動

部署名： 社会貢献・地域連携センター 地域共創推進室

I. 設置背景と目的

本学は地域社会との新たな関係の構築を目的に、社会への貢献を柱として「地域共創」の理念を掲げています。

平成 22 年、これまで積み重ねてきた地域貢献を継続しながら国見キャンパス、ステーションキャンパスを中心に半径 1 km 圏内を重点的な地域共創の場として位置づけ、日常的な取り組みを通しながら、学生・教職員と地域住民がお互いの顔が見られるお付き合いをし、大学と地域がともに発展できる環境構築を目指し、国見地区連合町内会と地域共創に関する相互協定を締結しました。加えて、地域コミュニティの中核拠点としてステーションキャンパス内に地域共創推進室を開設し、地域課題の情報収集・分析を行うと共に、地域が抱える課題に対して地域住民・学生・教職員が共通意識を持ち課題解決を図ること、地域づくりのために大学の持つ知的資源を地域資源として活かしながら地域共創を推進しています。

その懸け橋として活動しているのが今年で結成から 8 年目を迎える大学指定団体「まごのてくらぶ」です。学生が主体となり様々な地域課題に対して自立支援型の活動を実践しています。平成 23 年には青葉区も加わる三者間協定が締結され、青葉区内でも広く活動に取り組んでおり、本推進室が事務局としての機能を有しています。

また、東日本大震災の被災地である女川町社会福祉協議会との災害復興に向けた地域共創推進に関する協定に基づく活動や、過疎高齢化が進む七ヶ宿町での地域資源を活かした地域活性化事業、また大学が推進する県内外地域における地域活性化支援事業や東日本大震災における被災地支援活動の計画、立案、実働も担っています。

II. 活動概要

主な活動内容は以下の通り。

- ・本学、国見地区連合町内会、青葉区、本学による三者協定に基づく「国見地区・青葉区・東北福祉大学地域共創推進連絡協議会」の開催および、地域共創推進に関する事業等の基本的事項についての協議
- ・大学指定団体「まごのてくらぶ」の統括および指導
- ・地域活性化事業、とりわけ七ヶ宿町活性化事業に係わる計画・立案・実施に関すること
- ・朴木山キャンパス(仙台市泉区)を利活用した教育環境の整備等に関わること
- ・東日本大震災復興支援に係わる事業の計画・立案・実働に関すること
- ・県内の自治体(行政)及び諸団体、NPO 法人等との地域共創ならびに支援事業に関すること

その中でも、H28 年度は特に

1. 国見地区連合町内会地域共創事業
2. 七ヶ宿地域共創活動
3. 朴木山キャンパスにおける教育活動環境実施体制整備
4. 震災復興支援に関する事業

の 4 つについて取り組んできました。

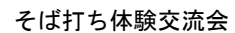
III. 活動内容（H28年度）

1. 国見地区連合町内会地域共創事業

1) 国見地区・青葉区・東北福祉大学地域共創推進連絡協議会

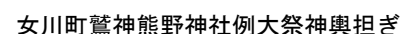
東北福祉大学教職員、仙台市青葉区区民部まちづくり推進課職員、国見地区連合町内会役員を構成員とした地域共創推進連絡協議会を定期的に開催しています。28 年度は 6 月 11 日、10 月 30 日、2 月 17 日の 3 回実施しました。会議の中で青葉区や連合町内会長からは地域共創推進室が統括している「まごのてくらぶ」

新たな取り組みとしては、国見地区連合町内会および他町内会との共同企画「そば打ち体験」を開催しました。これは、大学と地域が共に発展、成長できるように「そば打ち」を通じて絆づくりを深めるとともに、日ごろからお世話になっている町内会に感謝の気持ちと、地域住民の健康長寿の願いをこめた取り組みです。国見地区連合町内会からは役員をはじめとする高齢者や住民、大学からは地域共創推進室の教職員と「まごのてくらぶ」に所属する 8 名の学生が参加して行われ、そばの打ち方は「青葉蕎麦会」の会員を中心とした方々に指導いただきました。「手打ちうどんの打ち方」レシピを見ながら手ほどきをいただくことができ、町内の方々との会話も弾みました。連絡協議会ではいく方向で意見が交わされています。

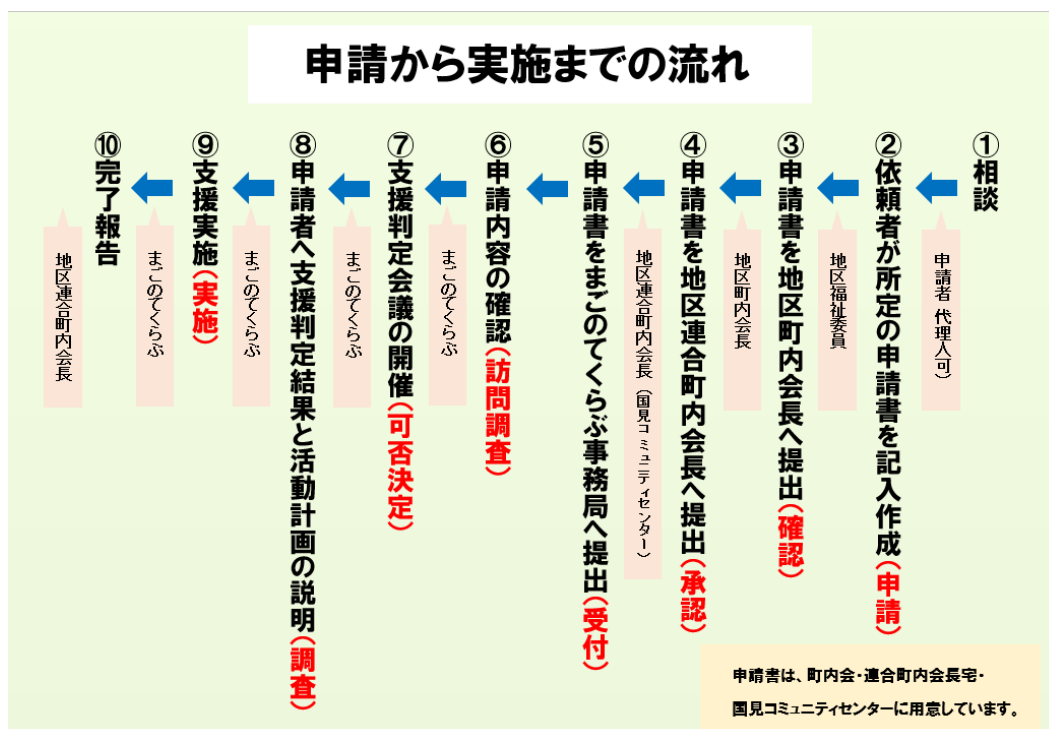


いただきました。「手打ちうどんの打ち方」レシピを見ながら手ほどきを受け、とてもおいしいお蕎麦をいただくことができ、町内の方々との会話も弾みました。連絡協議会では 29 年度は同様の共同企画を増やしていく方向で意見が交わされています。

大学指定団体「まごのてくらぶ」は大学と地域が共に発展・成長することを目的に平成 22 年 5 月に発足した学生サークルです。発足当時 15 名だった部員数はここ数年、60 名を超えるまでになり、28 年度は 63 名の学生が所属し、「地域の方の“孫の手”」となって支援活動にあたっています。特徴としては、かゆいところに手がとどく地域の“孫の手”役として、日常生活におけるちょっとしたお手伝いを通して、より良い地域づくりに貢献することを目指しています。取り組みとしては、個人宅を訪問して庭の草刈りや荷物整理などを行う個人支援、町内会と連携し運動会や夏まつりの運営やお手伝い、近隣の神社などの神輿担ぎなど伝統文化継承などを行う団体支援、そして日々の地域の安心・安全のため 26 年度から始めた「地域見守り支援活動」は 5 町内会で継続的に実施しており、今後は活動範囲を広げる方向で検討しています。



なお、まごのて支援活動の一般的な手続きは以下のとおり。





オリーブの植栽整備

同様に復興支援を目的として、石巻市網地島では「笑顔で暮らせる夢の島」を目指し、農山漁村地域の振興事業として、住民参加による島おこしに資するための基盤事業として地域環境整備活動を実施しました。具体的には「まごのてくらぶ」の学生6名と島民が協力して公園整備やオリーブの植栽環境整備などを中心に行いました。

また発足から7年を迎えた28年5月には、地域の中の大学として、地域住民との日常的な顔と顔が見える関係づくりの構築に努め、高齢者宅での支援活動や地域見守り活動、また地域の各種行事への支援活動など、大学資源と地域資源を活用した支援活動を行ない、地域社会の発展に寄与した功績などが評価され「いきいき青葉区推進協議会」より活動表彰を受章しました。この表彰は、魅力ある青葉区の地域づくりに長く貢献されている個人・団体に対して、その功績を称える表彰であり、5月25日に仙台市戦災復興記念館を会場とし、各地域から推薦された個人2名と10団体に、青葉区長及び当協議会会長からそれぞれ表彰状が授与されました。



いきいき青葉活動表彰

平成28年度 主な活動実績

- 4月 新入生活動説明会、国見コミュニティセンター花壇づくり(通年)
 - 5月 女川町鷲神熊野神社例大祭神輿担ぎ、鈴虫荘公園清掃・花壇づくり
 - 6月 「まごのてくらぶ」総会、新入生歓迎会、羽黒神社例大祭子ども神輿担ぎ
 - 7月 孫の手製作技術指導講習会、くにみ夏まつり
 - 9月 大崎八幡宮例大祭神輿担ぎ
 - 10月 国見学区民大運動会、くにみ街道まつり「地域共創社会貢献フォーラム」
 - 11月 国見コミセンまつり、鈴虫荘公園清掃、しめ縄造り
 - 12月 地域共創そば打ち、防災カレンダー製作、納会
 - 1月 「まごのてくらぶ」活動始め式、大崎八幡宮松焚祭(どんと祭)参拝者誘導
 - 2月 「まごのてくらぶ」共創委員会、卒業生送別会
 - 3月 半子町子ども会歓送迎会、国見の杜子ども会歓送迎会
- ※毎週一回の定例会
※地域見守り支援活動(5月～12月の平日)

「まごのてくらぶ」部員数と支援実績数の推移(平成22年度～28年度)

		22 年度	23 年度	24 年度	25 年度	26 年度	27 年度	28 年度
部員数		15	28	50	63	77	71	63
地域支援	項目数	15	10	21	21	37	28	30
	活動日数	19	26	46	51	73	57	32
	延人数	136	149	371	411	589	419	271
その他支援 (その他の地域等)	項目数	7	3	6	9	6	4	2
	活動日数	9	7	11	23	9	6	2
	延人数	44	34	31	86	77	25	9
特別支援 (災害支援等)	項目数	4	16	1	4	3	1	1
	活動日数	10	65	6	9	10	1	1
	延人数	62	337	48	104	61	1	6
合計	項目数	26	29	28	34	46	33	33
	活動日数	38	95	63	83	92	64	35
	延人数	242	520	450	601	727	445	286
地域見守り支援活動				実施町内会数	5	5	5	
				活動日数	34	79	86	
				延人数	158	241	310	

更に、「まごのてくらぶ」が行ってきた震災復興支援活動のひとつに「女川町復興ふれあい農園」活動がある。仮設住宅団地に農園を開墾、開園し被災住民の生きがいに大きく貢献してきましたが、町の復興計画により 28 年 11 月末をもって閉園を迎えました。復興の様子を見守り、女川の人たちの思いが込められている復興ふれあい農園の顔とも言える「看板」を、震災の記憶を風化させないための復興記念碑として、国見地区の子どもたちと一緒に野菜を育てている国見コミュニティセンター敷地内の農園に運び、子どもたちと共に移設作業を行いました。

3) 国見地区ふくし活動連絡会への参加



国見地区ふくし活動連絡会は、国見地域の福祉活動を推進するために、地域で活動している関係機関の「顔の見える」関係づくりと、互いの活動の情報交換を目的に 2010 年 8 月に発足しました。主な活動としては 3 ヶ月に一度、関係団体の連合町内会、地域社会福祉協議会、地区民生児童委員協議会、赤十字奉仕団、青葉区社会福祉協議会、国見包括支援センター、葉山地域包括支援センター、国見・千代田のより処ひなたぼっこ、東北文化学園大学、東北福祉大学の 10 団体が集まり、それぞれの地域での活動報告をし、情報の共有や課題について話し合いを行います。これだけの団体が集まり活発に話し合っている取り組みは仙台市内でも少なく注目されており、28 年度は 4 月 12 日・7 月 12 日・10 月 11 日・1 月 11 日に開催されました。

2. セツケ宿地域共創活動

国が掲げる地方創生事業の一環として、宮城県内最小人口・最高高齢化率の自治体であるセツケ宿町において、学習田や学習林を活用した「地域と自然の共創を学ぶ」や「スポーツによる地域活性化事業」、「武道・文化推進セミナー剣道交流会」など町や町民を共にした活動を継続的に展開しています。28 年度の活動内容と、これまでの活動実績(参加人数)は以下のとおり。

○地域と自然の共創を学ぶ

- 5 月 14 日 「田植え」 学生 13 名参加
- 6 月 4 日 「水田除草・山菜採集」 学生 30 名参加
- 7 月 2 日 「水田除草」「山里集落視察」 学生 15 名参加
- 10 月 1 日 「稲刈り」 学生 20 名参加

○スポーツによる地域活性化事業

- 9 月 25 日 「セツケ宿町民運動会中学生集団行動模範演技」

○武道・文化推進セミナー剣道交流会

- 10 月 8 日～9 日 「東北福祉大学体育会剣道部による剣道指導および稽古」 学生 20 名参加



横川地区学習田での稲刈り



武道・文化推進セミナー剣道交流会セツケ宿町役場にて (H28. 10. 7)

これまでの活動実績

	25 年度	26 年度	27 年度	28 年度
学生数	127	520	169	98
教職員数	95	137	48	35
地域	165	383	100	68
合計	387	1040	317	201

3. 朴木山キャンパスにおける教育活動環境・実施体制整備

本学が仙台市泉区西田中に所有する「朴木山キャンパス」では、恵まれた自然環境を活用した様々な教育プログラムを通して、学生の感性涵養および人格形成を図ることを目的にキャンパス整備が進められ、授業等で活用されています。

29年度からは1年生が履修する「リエゾンゼミⅠ」において自然体験学習を実施することが決まり、推進室においては実施内容の企画および実施に向けての全体統括にあたりました。自然体験学習の内容は次のとおり。

Aコース：防災活動コース

- ・避難路確保→遊歩道(整備された道)から、自然観察路(通路)→トレッキングねらい→足場の確保・歩き方・自然観察・危険な動植物への対応
- ・テント設営→集会テント、キャンプ用テント、タープの組み立て実習
- ・薪割り→機械を基本とし、場合によっては斧、鉋、のこぎり体験
- ・サイバイバル食づくり

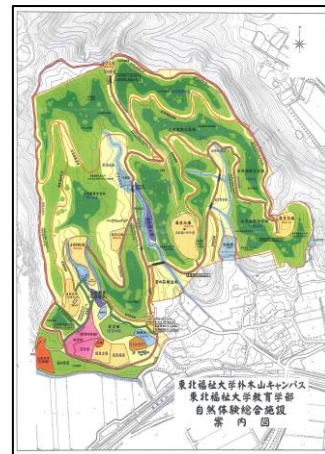
Bコース：自然体験コース

- ・野鳥オリエンテーリング
- ・カマドの活用
～カマド(一斗缶)で火を起こして湯を沸かしスープなど作る～

Cコース：ノルディックコース

遊歩道のノルディックウォーキング体験

例：東西周回コース 2.2km 中西周回コース 1.6km



朴木山キャンパス案内図

4. 震災復興支援に関する事業

1) ナタネによる東北復興プロジェクト

「ナタネによる東北復興プロジェクト」は、東日本大震災による巨大津波で塩害被害を受けた農家の「農業の復興と平和」を趣旨に掲げ、菜の花の観光資源、養蜂のための蜜源化、はちみつ・ローヤルゼリーの採取、ポリネーション事業用のミツバチの増群により農業の再興と、はちみつ・ローヤルゼリーの蜂產品開発による6次産業化を目的に、塩害土壌でも栽培可能な菜の花の植栽を平成26年度より開始しました。ミツバチ受粉によつての四季を通じた根菜類栽培の環境を整え、子供たちが自然に親しむためのミュージアムを誘致しています。塩害を受けた地域での菜の花による観光振興、根菜類の生産構築、養蜂家の育成、ミツバチ花粉媒介による野菜栽培の実施、収益性の多角化および産学官民連携の実現を図る総合的取り組みであり、生産活動・雇用の創出につながるものと期待しています。

平成27年秋に北釜地区の30.96haに植栽した菜の花は4月に満開になり、5月下旬まで鮮やかな黄色の世界が一面に広がりました。7月にはそのうちの4.2haからナタネを刈り取り搾油して菜種油を製造しました。また約200kgの蜂蜜が採取でき、加工した後「名取北釜のミツバチが集めたはちみつ」の商品名で名取市ふるさと納税の特産品として出品している他、本学くにみ街道まつりや一般向けにも上市しています。28年秋には30.13haの面積に約1,000万株を植栽し、29年度も同様の事業計画を実施する予定です。



名取北釜のミツバチが
集めたはちみつ



菜種油



農作業とナタネ収穫の様子

養蜂と採蜜の様子

2) 藤田養魚再生支援

平成 23 年 3 月の東日本大震災による津波によって福島県相馬市松川浦漁港のすぐ近くにある藤田養魚では、10 面あった野池（養魚池）とハウスが水没し、野池やハウスの損壊と錦鯉が流出するなどの被害を受けました。本学では 23 年より学生・教職員による再生支援活動に取り組んでおり今年で 4 年目を迎えています。

主な活動内容は野池の除草や稚魚の池上げ、模様を見極めての選別作業などであるが、今年は 7 月に 2 日間、稚魚の選別作業を行いました。野池には約 10 万匹の稚魚が養殖されていて、通常 6 月、7 月、10 月に合計 3 回の池上げと選別作業を行い、最終的にはおおよそ 5%ほどが選び抜かれて商品化されています。

今年もくにみ街道まつりで錦鯉や金魚の販売、金魚すくいなどのコーナーを設置し来場者の目を引いていました。

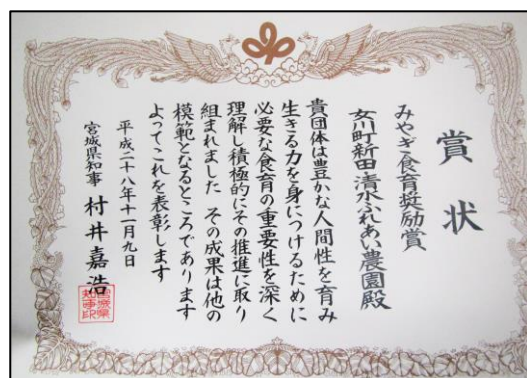


くにみ街道まつりでの出品

3) 女川町復興ふれあい農園

女川町清水・新田地区仮設団地に開墾、開園した約 300 坪の女川町復興ふれあい農園は、被災高齢者の生きがいをづくりとコミュニティづくりの場として、農園に従事する被災者のみならず、町内に暮らす親子のための食育の場として、また、全国から女川町にボランティアで訪れた各種団体等の交流の場として利用されてきました。しかし、女川町の復興土地利用計画により農園の閉鎖が決まり 11 月末をもって閉園となりました。

同時期の 11 月には食育推進に取り組んだ功績が評価されたふれあい農園が「みやぎ食育フォーラム」において「みやぎ食育奨励賞」を受賞し、有終の美を飾るにふさわしい閉園を迎えました。



みやぎ食育奨励賞の受賞

IV. 今後の展望

地域共創推進室の活動は広範にわたり展開しています。その中でも中核に位置する「地域」は大学が所在する青葉区であり国見地区です。大学が大学の資源を活用して様々な地域で研究、教育、社会貢献を実施している中で、足元を見つめ地元への貢献なくしては大学がそこに存在する意義が薄れてしまうという考えに基づき、これからはより一層密な近所づきあいと地域貢献を重視していくべきであると考え、大学と地域が緊密な関係を構築できる事業の企画、立案を行い実施していきます。特に学生が主体的に活動する「まごのてくらぶ」は国見地区のみならず、青葉区、仙台市からも年々注目度を増しています。ここからは依頼や要望に応える活動だけでなく、自ら考え、必要と思われる課題を分析し計画的に活動する組織の実行力が試される時期であると考えています。

また地域共創推進室においては、大学が掲げる社会貢献の理念を具体化するため、大学が所在する「地域」のみならず、県内外の地域の活性化に努めるため実施細案の立案、関係者間の調整、実際の活動に至るまでの全般的な業務の遂行に主体的にあたっていきます。

タイトル： 乳児期から学童期を中心とした子育て・子育て支援、発達支援事業

部署名： 社会貢献・地域連携センター 次世代育成支援室

I. 設置背景と目的

子どもを持つ若い世代の貧困、虐待、地域からの孤立、特別な教育的ニーズを有する乳幼児・児童の増加など、「子ども」や「子どもを育てる親」「学校」「地域」が抱える「生きづらさ」から発生する「不安」「戸惑い」がメディアに登場しない日はありません。東日本大震災の被災地では、今もこうした「不安」「戸惑い」が増幅しているにもかかわらず、日本社会の記憶から少しずつ薄れてきている現実があります。“地域に暮らす子どもやその親の世代の言い分”にじっくりと耳を傾ける姿勢を持ちともに歩み続けていくという理念なしには、将来を見据えた社会貢献や地域連携は実行できないと考えています。

本支援室では、こうした現代日本における家庭、学校、地域が抱える諸問題を正面から受けとめ、わが国の将来を担う子どもの健全な育成のため、乳児期から学童期を中心とした子育て・子育て支援、発達支援にかかる事業を行うと同時に、本学学生、特に看護師、保健師、保育士、幼稚園・小学校教諭等を目指す学生のための実学・実践教育（学生教育事業）と、上記目的を達成するための研究開発事業を行っています。

II. 活動概要

上記の理念、目的を果たすため、本支援室では大きく次の6事業を展開してきました。

- (1) 次世代育成事業（対象：乳幼児を育てている養育者、幼児および児童）
- (2) 児童に対する科学ものづくり教室事業（対象：児童、児童の養育者、地域住民）
- (3) 現役教員に対する研修事業（対象：卒業生を中心とした学校教員、地域住民）
- (4) 法人連携・地域連携事業（対象：養育者、地域住民等）
- (5) 学生教育事業（対象：学生スタッフ）
- (6) 上記事業に関連する調査研究事業

(1) から (4) の支援、連携事業について、乳幼児、児童、あるいはその親にかかわるすべての支援室スタッフ（担当教員だけでなく、看護師・保健師や保育士・幼稚園・小学校教諭を目指す学生）が、事業の途中および来年度実施に向けて、“改善していかなければならないところ”を見極めるプロセスとして、(5) や (6) の教育、研究事業があります。社会貢献・地域連携活動が、“単なる自己満足のボランティア”にならないようにするためには、自己評価は不可欠と考えられるためです。

○室長 白井秀明

○室員（教員スタッフ） 小石川秀一、下山田鮎美、青木一則、渥美綾子、高野亜紀子

（協力教員）大関信隆

○室員（学生スタッフ） 上記教員スタッフのゼミに所属する学生、その他活動への参画を希望する学生

○外部協力者 金野純恵園長（国見ヶ丘せんだんの杜保育園園長）

Ⅲ. 活動内容（H28年度）

（1）次世代育成事業

親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんがきた！”

平成 28 年 10 月に標記講座（4 回シリーズ）の開催を予定していましたが、応募者が最低開催人数に満たなかったため開催を見送りました。今回は、ファシリテーター認定要件（常時 5 組以上の参加）との兼ね合いでこのような対応をとらざるを得ませんでした。平成 29 年度は、仙台市保健福祉センター及び子育て支援団体とのタイアップを図るとともに講座の開催時期及び周知方法を検討のうえ、開催予定です。

（2）児童に対する科学ものづくり教室事業

平成 28 年度は計 2 回（7 月 16 日、12 月 3 日）開催することができました。また、仙台市内の小学校の町内会行事のお楽しみ会として科学ものづくり教室も開催（11 月 20 日）しました。

①「あそび広場バウハウス エコ・ソーラーカーをつくろう！」

太陽電池を使ってモーターを動かし、キャパシタという蓄電器も取り付けた、本物の電気自動車さながらのエコ・カーを作成しました。参加した子どもたち一人ひとりが、思い思いの飾り付けをして、みんな笑顔でオリジナルカーをお土産として持ち帰りました。場所は理科室。22 組（38 名）の親子が参加しています。



②「あそび広場バウハウス LED をつけたクリスマスイルミネーションをつくろう」

まず、LED が普通の電球と違ってわずかな電流で光るとても“エコ”な電球であることを実験で紹介しました。その後、その LED とサンタクロースの置物などを組み合わせて、自動で色が変わるクリスマスツリーの脇に置くといっそうクリスマスムードが盛り上がる置物を作成しました。こちらも、子どもたちそれぞれが思い思いの飾り付けをして、お気に入りの自分の作品をお土産として持ち帰りました。場所は理科室。6 組（11 名）の親子が参加しています。



③市内小学校のお楽しみ会での科学ものづくり教室

仙台市内の小学校の町内会行事として科学ものづくり教室を開いて欲しいとの要請があり、11 月 20 日に開催する運びとなりました。当日は約 40 名の子どもたちと約 10 名の運営スタッフ（保護者）の方の参加がありました。最初は、「空気」をテーマにした実験ショー。空気のあるところには水は入れない、ブロワーでボールを空中に浮遊させる、空気砲などなど、普段目に見えずあまり意識したことのない空気の存在そしてその力を楽しく、驚きを持って感じてもらえました。その後、子どもたちは、順番にブースを回り、毛糸とファイルリングを使った科学手品、磁石を使った科学おもちゃ、偏光板を使った万華鏡といったものづくりを十分に楽しみ、それぞれお土産として持

ち帰りました。こうした「科学ものづくり教室」は、これまでは大学構内でしか実施してきませんでしたが、学外に出張し、その地域の学校行事として貢献できる機会を作り出せるため、来年度以降も実施を検討しています。



(3) 現役教員に対する研修事業

本学の理科室において、本学の子ども教育学科の卒業生を中心として、仙台市内の小学校現役教員や退職教員、他大学の教育や授業実践を専門とする教員が集まり、小学校を中心とした授業実践について報告や提案、さらには実験や教材作成体験を行う「第2日曜の会」という学習会を、幼年教育部担当教員2名が中心となって開催しました。7、8月以外の毎月開催、毎回5名から10名くらいの参加者が集まりました。各自の実践記録や学級便りなどを持ち寄り、うまくいかなかった実験、授業をされていて困ったこと、子どもと関わるときの問題など、具体的な授業や子どもとの関わり、教科書で授業を行うときのポイントなどの話題について検討や提案が行われました。夏休み明けからは、採用試験が終了した本学の4年生なども参加し、学級経営のポイント、子どもや保護者との関わりのポイントなどが話題となるときもありました。参加人数に波があるものの、具体的な子どもとの授業や学校でのやりとりに基づいた報告や話し合いは、話題を提供した教員だけでなく参加者全員に「教えるということの意味は」「教科書の意図を読み取ることの大切さ」「子どもの言い分を聞き問い返しながら概念形成をすることの大切さ」など教員としての専門性を共有できる場となり、将来をつくる子どもたちの教育に携わる教員の研修としては大いに貢献できる機会となりました。来年度以降も続けていく予定です。

2017年1月22日第二日曜の会報告

参加者は10名でした。

報告は

高橋○○さん

作文の報告、詩の授業についての報告、週末作文の報告などです。

学級通信を持参しての報告・・・子どもの写真が通信に大きく入れ、見やすく読みやすい内容のものです。

「こうじえんでしらべたこと」という題名で書かれたものを紹介します。

「ぼくは、こうじえんでしらべて、すごくすきになりました。なぜかと言うと、むずかしく、あつい本だったので、しらべるとほめられるからです。そこで、お母さんに買ってと言うと、びっくりしていました。でも買ってくれました。自分のこうじえんがあるので、これから自分で調べたいと思います。」

これは、ビーバーの大工事などの授業の中で○○さんが2年生でも辞書を使って言葉を調べる活動を取り入れた成果です。子ども達が言葉に興味を持って調べる楽しさを見つけ出したようです。

第2日曜の会記録より

(4) 法人連携・地域連携事業

① 親子遊び「はっぴーらんど」および育児講座

国見ヶ丘せんだんの杜保育園子育て支援センターと共催で、乳幼児およびその養育者を対象とした親子遊び「はっぴーらんど」および育児講座を開催しました。親子遊び「はっぴーらんど」の開催数及び利用者数（のべ）は、第Ⅰ期（5月～8月）が30回・488名、第Ⅱ期（8月～11月）が30回・542名、第Ⅲ期（12月～3月）が24回・485名。育児講座のうち、リフレッシュタイムの開催数及び利用者数（のべ）は5回・70名、クリスマスパーティ利用者数は23名でした。

回数を重ねるごとに子ども、養育者、職員との親睦が深まっていく姿が見受けられ、事業の成果もあがっていることから、平成29年度においても活動を継続する方向で考えています。また、(5) 学生教育事業として、これらの活動に学生スタッフが参画できるようなシステム構築を行う予定です。

②Future 子育てへの提言 - 子育ての疑問・質問」(月刊「ままぱれ宮城版」(東北放送、メディアパレット発行)への連載(1回/月)(主担当:下山田、渥美)

読者から寄せられた子育ての疑問・質問について、2題/月を担当し回答を連載しました。読者からは、質問内容及びそれらへの回答が安心感につながるとの評価を得ています。

Q.1 息に寒くなると毎日の服選に悩んでいます。我が家の2歳の息子は最近よく動くようになってきたので、外遊びのときに厚着させても暑がったりします。子どもの年齢にあわせた冬の服選のポイントなありますか？
(仙台市東区・5才)

下山田先生 子育ては「基礎知識」が鍵なので、あまり経験をなさず、読んでいて汗をかいたような感覚を覚えるほど状況に応じて調整しましょう。

12月に入り、いよいよ冬本番ですね。お子さんにとって、毎日の服装は悩ましいポイントです。我が家の2歳の息子は最近よく動くようになってきたので、外遊びのときに厚着させても暑がったりします。子どもの年齢にあわせた冬の服選のポイントなありますか？
(仙台市東区・5才)

Q.2 小学1年生の娘が最近「ペット(ネコ)を飼いたい!」と言い出しました。夫や同居の義父・義母は「いんじまないう」と言っています。私はすぐに飼ってしまうのではないかと心配でなかなか出せません。まだ早い気がするのですが……
(石巻市・0才)

渥美先生 お子さんと一緒に飼育環境を整える必要。ペットのいる生活をイメージしてはどうでしょうか？

ネコを飼いたいとお子さんが言っているけど、飼ってしまおうのではないかと心配している。我が家の2歳の息子は最近よく動くようになってきたので、外遊びのときに厚着させても暑がったりします。子どもの年齢にあわせた冬の服選のポイントなありますか？
(仙台市東区・5才)

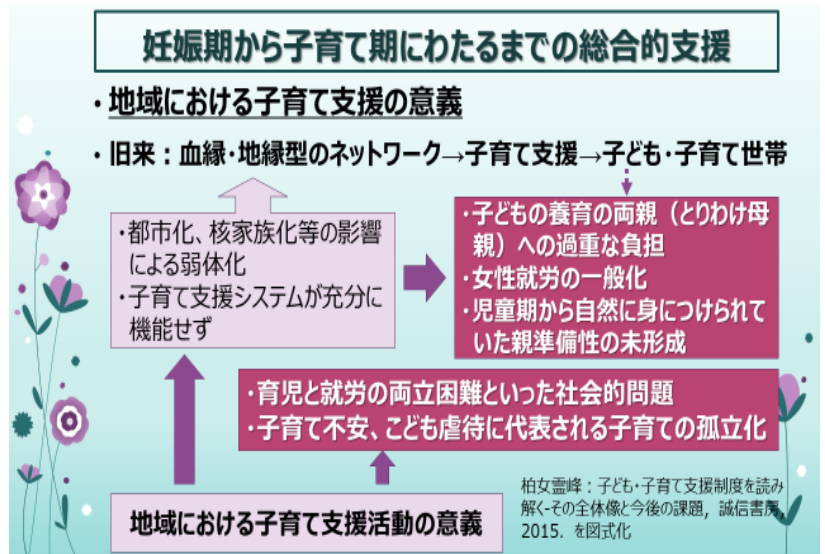
ネコを飼いたいとお子さんが言っているけど、飼ってしまおうのではないかと心配している。我が家の2歳の息子は最近よく動くようになってきたので、外遊びのときに厚着させても暑がったりします。子どもの年齢にあわせた冬の服選のポイントなありますか？
(仙台市東区・5才)

ネコを飼いたいとお子さんが言っているけど、飼ってしまおうのではないかと心配している。我が家の2歳の息子は最近よく動くようになってきたので、外遊びのときに厚着させても暑がったりします。子どもの年齢にあわせた冬の服選のポイントなありますか？
(仙台市東区・5才)

「ママパレ」連載記事より

③地域における子育て支援団体等との協働

地域において活動中の子育て支援団体の支援として、仙台市子供相談支援センター「子育てセミナー」(9月9日)、福島県ホームスタート連絡協議会「子育て世代包括支援研修会」(10/4)、蒲町保育所子育て支援センター「子育て支援関係者研修会」(10月14日)、落合保育所子育て支援センター「育児講座」(11月5日)、石巻市「母子こころの健康づくり講演会」(12/12)、の講師を担当しました。国見ヶ丘せんだんの杜保育園ホームスタート事業トラスティも担当しています(下山田)。



(5) 学生教育事業

- ①母子保健部については、(4) ①の親子遊び「はっぴーらんど」及び育児講座に対する学生スタッフの参画について、国見ヶ丘せんだんの杜保育園園長及び子育て支援センター担当保育士と協議を重ね、システム構築を図りました。平成 29 年度より、学生スタッフの参画を開始し、実践活動そのものだけではなく、学科を越えた協働の実践的学習の場も提供していくことを考えています。
- ②幼年教育部については、(3) の現役教員への研修事業での話し合いや討論に参加させる以外は、時間的な問題もあり、十分な学生教育事業が行えませんでした。

(6) 上記事業に関連する調査研究事業

- ①母子保健部では「看護大学生における実践的学習による教育効果」をテーマとした研究のデータ整理及び分析を行いました。分析は平成 29 年度も引き続き行う予定です。(主担当：下山田鮎美、渥美綾子、佐藤晃子)
- ②幼年教育部については、十分な調査研究事業が展開できませんでした。来年度以降の課題とします。

IV. 今後の展望

どの事業も、参加者数からすれば規模は大きなものとは言えませんが、利用対象者と密なコミュニケーションをとりながら実施するように心がけています。来年度は、次世代育成事業として「親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんがきた！”」講座の開催を是非実現し、仙台市保健福祉センターだけでなく広く子育て支援団体と連携しながら、親子の子育ち・子育て支援を社会貢献の軸としていく予定です。また、児童に対する科学ものづくり教室事業は、学内だけでなく、各学校の町内会あるいは PTA 行事としてニーズがあることが予想されますので、来年度以降は、出張教室などの実現可能性を探っていきます。卒業生を中心とした現役教員への研修授業については、日常的に現役教員が抱える悩みや問題にきめ細かく対応するという意味で、教育学部で同じリカレント教育としての意図を持ち年 1 回開催している「教育フォーラム」とは違った社会貢献のひとつと考えられますので、来年度以降も実施していきます。さらに、学生スタッフの看護師・保健師、あるいは保育士・教員養成のプロセスにおいて、この支援室の活動に継続的に参加することがどんな教育的効果を持つのかについて、教員スタッフが連携して評価研究を実施する方法を模索していきます。

タイトル： 「予防福祉」の普及・啓発と生涯現役社会の実現に向けた取り組み

部署名： 社会貢献・地域連携センター 予防福祉健康増進推進室

I. 設置背景と目的

「予防福祉健康増進推進室」は、本学学生及び教職員の健康教育・実学教育を行うとともに、本学及び本学関連グループが推進する「予防福祉」の普及・啓発のため、本学感性福祉研究所の研究成果の事業化及び研究へのフィードバック、社会貢献を行うことなどを目的として、平成 16 年「予防福祉健康増進センター」として本学ウェルコム 21 に開設されました。本学ステーションキャンパス館に移った後、平成 23 年に本学国見ヶ丘キャンパスに移転、平成 24 年には「社会貢献・地域連携センター予防福祉健康増進推進室」へ名称を変更しました。平成 27 年度から、本学仙台駅東口キャンパスでも事業を開始し、平成 28 年度には、国見ヶ丘キャンパスと併せて拠点を構え、本格的に事業展開を進めています。



写真 1 予防福祉健康増進推進室 全景

背景として、平成 16 年度経済産業省「健康サービス創出支援事業」の採択を受け、本学と仙台市、東北電力株式会社など産学官連携の共同体である仙台ウェルネス・コンソーシアム（SWC）により、新しい健康サービスの開発とシニアの雇用創出を目指して、普及啓発活動やコミュニティ型会員制度「仙台元気塾」（以下、「元気塾」）の開設、サービスプログラムの開発と提供、人材育成、IT 基盤の整備等からなる、一連のモデル化が行われたことがあります。開発された各サービスは継続されており、同時に学術機関との連携による長期の検証が行われています。

II. 活動概要

当推進室では、現在、健康推進事業、人材育成事業、予防福祉コンサルティング事業（自治体受託事業等）を中心に事業展開しています。

健康増進事業では、平成 26 年に 10 周年を迎えた「元気塾」を拠点に、通年で開催しているメディカルフィットネス、クリニカルアートの各種プログラムの他、会員の交流、啓発を目的としたセミナーなどを開催しています。現在の会員数は県内外合わせて 537 名（男性 130 名、女性 407 名、平均年齢 65.9 歳、平成 29 年 3 月 31 日現在。）です。

人材育成事業では、介護予防事業の現場で活躍することを目指す指導者・サポーターの養成や、団体研修の受け入れなどを行っています。

予防福祉コンサルティング事業（自治体受託事業等）は介護予防事業・生活習慣病予防などの健康福祉分野の先端施設として、国や自治体と連携したさまざまなパイロット事業や、介護予防事業の企画・提案・指導・

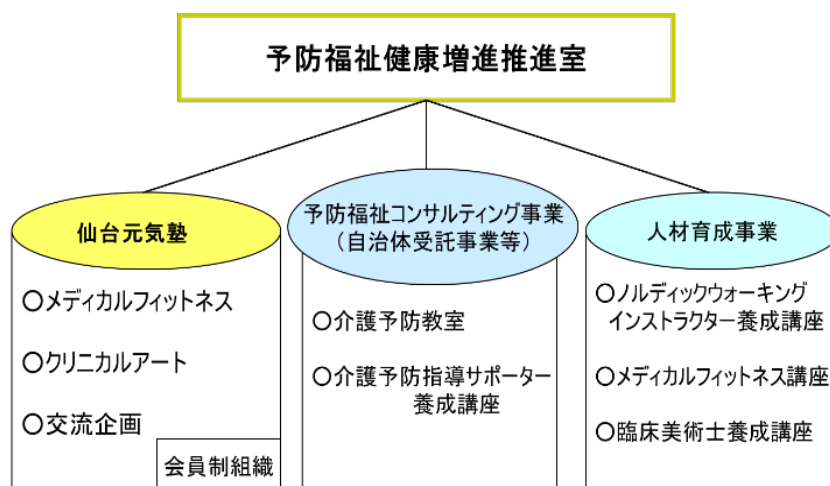


図 1 予防福祉健康増進推進室 事業概要

実施などを行っています。平成 28 年度は県内外 2 県 1 市 4 町と連携して事業を行った他、民間団体等への講師派遣を行いました。

また、健康増進・介護予防・コミュニティ形成等に関する産学官連携による共同研究も行っています。



写真2 ダンベル教室 教室風景



写真3 健脚骨太教室風景

Ⅲ. 活動内容（H28年度）

（1）「仙台元気塾」の取り組み

メディカルフィットネスでは、健康状態や身体状況を把握し、健康づくりや介護予防運動のプログラムを提供する運動指導を行っています。ニーズに合ったプログラムが選択できるよう、多種多様な運動教室、個別サービスが用意されており、メディカルフィットネスの平成 28 年度の延べ開催回数は 785 回、サービスの延べ利用者数は 7,590 名にのびります。

クリニカルアート（臨床美術）とは、アートセラピーのひとつで、創作活動やコミュニケーションを通して、脳とこころを活性化させ、認知症の予防や改善、こころの問題のケアを目的としており、こどもの感性教育としても注目されています。平成 28 年度は、『脳いきいき臨床美術』、『こしえっと』、『季節のアート教室』、『親子 de アート』、『はじめての臨床美術』等の教室を開催し、サービスの延べ利用者数は 636 名でした。

その他、さまざまな切り口から、こころとからだの健康法や元気づくりを学ぶ『元気・健康セミナー』、会員やスタッフとの交流を図る『交流企画』を定期的開催。

これら「元気塾」の活動は、健康づくりだけでなく、会員のいきがづくり、仲間づくりにも大きく寄与しています。



写真4 ミュージックフィットネス教室 教室風景



写真5 親子 de アート 教室風景

仙台元気塾プログラム（東口キャンパス開催分）

ぷらっとフィットネス(週3日開催)	のんびりゆったりノルディックウォーキング
元気チャレンジ！のんびり教室	アクティブ！ノルディックウォーキング
元気ハツラツ！チャレンジ教室	はじめての臨床美術
初心者のためのアクティブダンベルクラス	オイルパステル画教室
smileステップ 1・2・3	色鉛筆画教室
今からはじめるロコモ予防教室60・90	気軽に楽しむものづくり こしえっと
土曜ダンベル	季節のアート教室
季節の歌と体操を楽しむ♪ ミュージックフィットネス教室	家族deあーと
仙台元気塾プログラム(国見ヶ丘キャンパス開催分)	
生涯筋造フィット(週4日開催)	健脚骨太教室
Let'sロコモ予防教室	健康づくりはじめての一步

表1 仙台元気塾で開催されている各種プログラム

(2)人材育成事業

人材育成事業は、健康づくり、介護予防の運動指導者・ボランティア対象のメディカルフィットネス講座、臨床美術士養成講座、ノルディックウォーキングインストラクター養成講座などを行っています。社会参画に必要となる基礎的な健康を獲得し、さらに人材育成の教育プログラムを受けることで、それぞれの領域での基礎的なエンployアビリティ（雇用され得る能力）の獲得が可能となります。これにより、サービスを受ける側から、サービスを提供する側に回り、社会参画できることを「元気塾モデル（図2）」とし、事業開発のコンセプトとしてきました。

平成28年度は、東北福祉大学、仙台市、仙台市医師会、㈱福祉工房などによる『次世代・仙台ウエルネスコンソーシアム（経済産業省「平成28年度 健康寿命延伸産業創出推進事業」）』を立ち上げ、高齢者の「健康づくり」と「就労マッチング」による生涯現役社会の実現に向けた事業を展開しています。

具体的には、社会参加の潜在ニーズを持つ高齢者の発掘を狙いとして、健康サービスである既存の教室の他、新規にネクストチャレンジセミナーを開催しました。次のステップとして健康サービス参加者を対象に、教育サービスである新たな人材育成事業を開催、それらに参加した51名に対し就労支援を行うなど、高齢者の社会参画に向けて積極的な事業を展開しました。就労、ボランティアなど社会参画した登録者からは、『就労によって体力の維持向上が体感できるほどの変化があった』、『新たな交流や、積極的な取り組みが、余暇時間の有効活用につながった』などの意見が多く寄せられ、就労支援が健康づくりや介護予防に寄与する一定の成果を収めることができました。



写真6 ノルディックウォーキング 教室風景

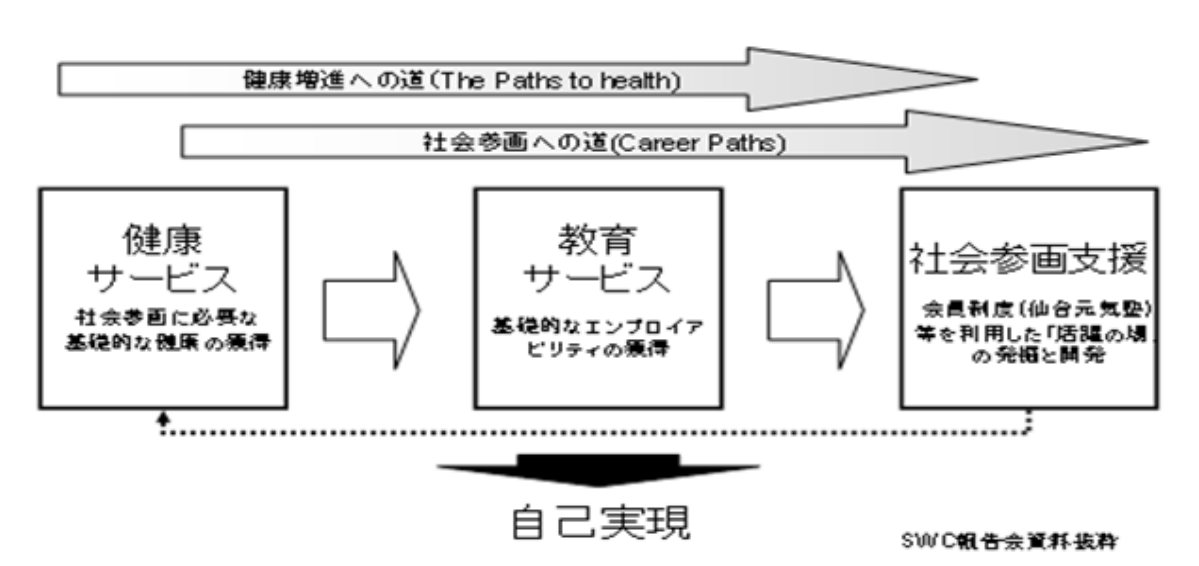


図2 SWCの健康増進と社会参画の連結モデル

(3) 学生実習の受け入れ

当推進室は、本学学生の様々な実習の受け入れを行っています。年間 280 時間以上の実習が必要な実学臨床教育では、本学の建学の精神「行学一如」の理念の基、「介護予防」、「健康増進」について健康を支える社会のしくみを知ること、実習を通じて「高齢者」について理解すること、地域の構成員としての自覚を持つことなどを学んでいる。平成 28 年度は、12 名の実学臨床教育の実習を受け入れました。

IV. 今後の展望

自立支援型健康サービスである「元気塾」が開設された当初から、「健康サービス」の提供、さらに上位の健康サービスとして人材育成等の「教育サービス」の提供など、健康意識の向上を目的とした普及啓発活動を行ってきました。今年度から本格的に本学仙台駅東口キャンパスを活動拠点の一つとして事業推進できたことで、「社会参画への道」が開かれ、さらなる健康増進とキャリアアップを目指すことが可能となりつつあります。「元気塾」のプログラムの充実を図る一方、引き続き社会参画による自己実現や健康増進の場を提供できるよう、キャリアパスの提示などをより具体的に進め、社会貢献活動を推進していきます。



写真9 生涯筋造フィット 教室風景



写真10 クリニカルアート 教室風景



写真11 交流企画(芋煮会) 風景

タイトル： 鉄道交流ステーションの活動

部署名： 社会貢献・地域連携センター 鉄道交流ステーション

I. 設置背景と目的

2007年5月、JR仙山線に「東北福祉大前」駅が開業したのを機に開設された鉄道資料館です。仙山線は、仙台と山形を結ぶ幹線であると同時に、交流電化試験が行われた路線として知られています。交流電化の技術は新幹線誕生の基となり、東北地方の鉄道や経済の発展にも寄与しました。こうした地域の歴史や文化を理解し未来を語り合う場として学生の教育に活用しながら、地域の皆様にも利用していただき、鉄道を通して大学と地域の交流の輪が広がっていくことを目指しています。

東北地方の鉄道に関する資料を収集・保存して、研究に寄与するとともに、さまざまなテーマで企画展示を開催し、市民に情報を発信しています。さらにブックレットを発刊して研究・活動成果を公表しています。

また、鉄道模型館（TFUスカイトレイン）を2013年10月から併設して、市民参加型でH0ゲージの鉄道模型を運転しています。東北最大級のレイアウトを設置し、日本の列車とヨーロッパの列車が同時に行き交う迫力ある鉄道模型の走りを大人も子どもも一緒に楽しめる場となっています。

II. 活動概要

1. 企画展示

展示室では、年3回の企画展を開催しています。本資料室で所蔵している資料だけでなく、鉄道博物館など資料を収蔵している他の博物館施設との連携、また、鉄道会社の皆様や愛好家の方々のご協力をいただきながら幅広いテーマで行ってきました。テーマは外部委員も含めた運営委員会で検討し、決定しています。狭い展示スペースですが、ケースや壁面を活用して、愛好家にも一般市民の方にも楽しんでいただける内容になるよう努力してきました。また、企画展のテーマに関連した講演会も実施しています。そして講演会の記録や企画展の内容をまとめたブックレットもこれまでに3冊発行しています。

2. 鉄道模型館

模型館では、ご寄贈いただいたドイツのメルクリン社製の欧州型模型が運転されています。同時に、地元の愛好家による日本の列車も運行しています。車両の運転やメンテナンスは、市民ボランティアによって支えられています。そのため現在は週1回・土曜日みの開館となっていますが、市民交流の場になっています。

3. その他活動

市民センターなどが主催する学習会、子どもたちの校外学習、テレビ番組制作への情報提供などにも協力しています。さらに若者を対象とした鉄道フォトコンテストも開催しています。

III. 活動内容（H28年度）

1. 企画展示

2016年度は、①第27回企画展 旅のわき役シリーズⅢ「車掌のしごと」（2016年4月5日～7月2日）、②第28回企画展「空から眺める駅の姿容（すがた）と変遷」（8月2日～11月5日）、③第29回企画展「東北・北海道を走ったブルートレイン」（12月6日～2017年3月4日）を開催しました。

①第27回企画展 旅のわき役シリーズⅢ「車掌のしごと」（2016年4月5日～7月2日）

鉄道の業務の中でも身近な「車掌のしごと」を紹介しました。車掌の仕事の1日として福島交通（株）飯坂線の新米車掌の密着レポートのパネル展示、車掌職の事始めから新幹線車掌の業務まで、写真、制服、車掌が

携帯する新旧の道具など 155 点の資料を展示しました。(59 日開催、総入館者 2,087 名)



第 27 回企画展 旅のわき役シリーズⅢ「車掌のしごと」(2016 年 4 月 5 日～7 月 2 日) より

②第 28 回企画展「空から眺める駅の姿容（すがた）と変遷」（8 月 2 日～11 月 5 日）

駅の移り変わりを鳥の目になって見ていこうというテーマで、航空写真を手がかりに、仙台駅をはじめ東北の主要駅の構造や配置の変化から、戦後～近年にかけての鉄道駅の変遷を探りました。また、「空鉄」で活躍中の写真家・吉永陽一氏が仙台周辺の空から撮影した作品コーナーも好評を博しました。(62 日開催、総入館者 2,633 名) 関連行事として吉永氏によるスライド&トークショーを開催、31 名の参加者があり、関東地方から参加された方もおられました。



第 28 回企画展「空から眺める駅の姿容（すがた）と変遷」（8 月 2 日～11 月 5 日）より

③第 29 回企画展「東北・北海道を走ったブルートレイン」(12 月 6 日～2017 年 3 月 4 日)

1964 年に「はくつる」が走って以来、旅情と憧憬の象徴として「ブルートレイン」の愛称で親しまれた寝台列車。その中でも、2016 年の「カシオペア」を最後に、定期列車としては姿を消した東北・北海道の寝台列車を特集しました。本企画展では、鉄道博物館、JR 東日本、JR 北海道などが所蔵する貴重な資料のほか、各世代の愛好家が撮ってきた写真や思い出の切符や品々も結集して「ブルートレイン」の歩みをたどり、その魅力を紹介できました。各位の協力を得て開館 10 年の節目にふさわしい内容となりました。(52 日開催、総入館者 2,369 名) 3 つの企画展をあわせて 7,089 名の入館者を迎えることができました。



第 29 回企画展「東北・北海道を走ったブルートレイン」(12 月 6 日～3 月 4 日) より

2. 鉄道模型館

臨時開館も含めて 30 日間(定期開館 28 日、臨時開館 2 日)開館・運行しました。入館者は 2,113 人(うち子ども 827 人)で、この他にボランティアの方 187 人(延べ人数)が協力して下さいました。1 日平均の入館者は 70.4 人で、大人と子どもとスタッフの交流の輪が広がっています。運転会の中では、教育普及事業として第 29 回企画展「東北・北海道を走ったブルートレイン」の開催にあわせ、時代や地域などの違う「ブルートレイン」を集めてテーマ別に走らせるなどの工夫も試みています。

さらにはレイアウトの改良の一環として、アプト式登山列車路線の新線が開通、さらに新設した懸垂電車線では子供たちにペーパークラフトで車両を作ってもらい試みを実施しています。また、次年度に向けスイッチバック式路線の新設を計画するなど、子どもの学習の場としての整備・拡張が行われています。

また、テレビなどのマスコミからも注目され、模型が走っている様子が紹介されています。



鉄道模型館の活動より

3. その他の活動

これまで発行した3種類のブックレットはいずれも好評で、販売実績も伸びており、現在第4号を編集集中です。見学では、太白区中央市民センターなどの市民講座、さくら市社会福祉協議会の研修、仙台市内の小中学生の校外学習などを受け入れています。また、歴史の町『長町と秋保電鉄のパネル写真展』（ザ・モール仙台長町開催）などに対して資料提供などの協力を行い、さらに SMMA（仙台・宮城博物館連絡協議会）主催の「ミュージアムユニバース」にも参加し、鉄道の歴史に関心を持っていただけるような情報提供に取り組みました。

「第8回 鉄道フォトコンテスト」（中学生から大学生そして22歳までの青年を対象）では、44作品の応募があり、その中からグランプリ1点、優秀賞1点、特別賞1点、入選6点が選ばれました。

IV. 今後の展望

私たちの活動も10年が経過し、地域の皆様にも少しずつ認知していただけるようになりました。また、鉄道会社からも全面的なご協力をいただいています。さらに、博物館施設としての認知度も高まってきたことから博物館間の連携も強いものになり、その中で活動への期待も大きくなっています。

これからの活動の中では、企画展の充実を図ることが第1の大きな使命と受け止めています。テーマ、資料の構成や展示の仕方、刊行物の発行など、今まで以上に力を入れていく予定です。それと並行して、散逸の恐れのある貴重な鉄道資料を、地域の宝として収集・保存していく必要性がますます高まりますので、その点にもさらなる努力をするつもりです。

さらに、地域貢献を一層推進するために、鉄道模型館の充実、地域活動への支援の強化を図っていきたいと考えています。

タイトル： 認知症の方が尊厳を持って暮らせる実践的取り組み

部署名： 社会貢献・地域連携センター 認知症予防対策研究室

I. 設置背景と目的

平成 22 年 12 月現在で、わが国における認知症罹患者数は 400 万人に上るといわれており、MCI（軽度認知障害）462 万人まで加えると、その数は 900 万人に迫ります。認知症罹患者の行方不明や交通事故、詐欺被害、個人の尊厳を脅かす差別などが全国各地で連日起こっており、近年大きな社会問題となっています。

このような大きな社会問題となる前から本学は、人間の幸福（福祉）を科学し実践する大学として社会貢献活動を行ってきました。具体的には、社会福祉法人及び医療社団法人を設立し、これまでに特別養護老人福祉施設 4 ヶ所と老人保健施設 1 ヶ所を開設し、認知症入居者・認知症居宅者に対するケアや様々な支援を行っています。

平成 13 年には、国の委託による認知症介護研究・研修仙台センター（DCRC）を開設し、認知症研究は元より認知症介護指導者の養成、平成 20 年には、大学付属病院せんだんホスピタルを開院し、認知症罹患者の診療治療を開始。平成 25 年 12 月 24 日には、本学と仙台市の間で、認知症対策推進に関する連携協定を締結し、以後、定期会合を持ち協定事項の具体的な実践を行ってきました。

平成 27 年 4 月には、社会貢献・地域連携センター内に認知症予防対策・研究室を設置し、認知症予防対策及び研究を進め、平成 28 年 8 月 1 日にはせんだんホスピタルが認知症疾患医療センターの認定を受けました。これまでよりさらに認知症罹患者等に対して医療福祉的な関わりを積極的に展開出来ることになります。

さらに平成 28 年 12 月 10 日、東口キャンパスにおいて公認サークル「レオクラブ」が、一般市民向けに認知症サポーター養成講座を実施しました。

本学は、深刻化しつつある認知症対策について以上のような各種の取り組みを展開してきたところです。今後とも引き続き、本学が持つ資源やノウハウ、ネットワーク力を駆使して認知症問題の軽減化や解決を図っていきます。

II. 活動概要

主に仙台市との協定事項に謳われた事業を実施しました。

- (1) 認知症の医療と介護の連携モデルの推進事業
- (2) 認知症の方を支援する専門職の人材育成事業
- (3) 認知症ケアパス作成事業
- (4) 認知症の正しい理解と支え合いの推進事業
- (5) 地域のつどいの場の創出推進事業
- (6) 国際認知症研究センター構想推進事業
- (7) 協定会議

Ⅲ. 活動内容（H28年度）

（1） 認知症の医療と介護の連携モデルの推進事業

今年度、認知症疾患医療センターの認定を受けました。認定後も引き続き、仙台市と継続的な協議を行いながら、果たすべき機能を発揮していきます。

尚、認知症疾患医療センターは国が全国に 150 ケ所を整備する計画を持っています。

（2） 認知症の方を支援する専門職の人材育成事業

認知症介護研究・研修仙台センターが、カリキュラム改定作業に参画。

認知症介護研究・研修仙台センターによる新カリキュラムモデル事業を泉区役所で 1 回実施しています。

【対象者】 50 名

（3） 認知症ケアパス作成事業

認知症介護研究・研修仙台センターの研究員が、ケアパス策定委員会に参画し作成に大きく関与しました。1 万部発行し、関係機関や市民に配布を行っています。現在は、地域版ケアパスを作成中で、引き続き既述の研究員が参画中です。

センター研究員の関与は仙台市側で高い評価を得ています。

（4） 認知症の正しい理解と支え合いの推進事業

認知症の正しい理解促進の中核事業として位置づけている認知症サポーター養成講座を全学生に受講させる全国初の取り組みを行っています。昨年度は、モデル事業として希望学生向けに 2 回実施しました。

レオクラブで実施した養成講座については、河北新報に取り上げられています。

また、関連法人の DCRC では、3 月に都内の有楽町ホールにおいて、全国に向けて認知症カフェについてのセミナーを開催しました。（500 名参加。）

今年度は、1 年生全員及び一般市民に対して認知症サポーター養成講座を実施した。

【養成数】 平成 26 年度 280 名 （＊参考）

平成 27 年度 1550 名 （＊参考）

平成 28 年度 1550 名



(5) 地域のつどいの場の創出推進事業

認知症カフェの発祥地であるオランダはじめ先進国において、調査研究を行ってきた研究員の監修・助言の下に、認知症カフェを開設しました。研究員と施設長で定期的な会議を持ちながら、よりよいカフェ運営を行っています。

【開催数】＊人数は延べ人数で算出。

カフェ名	施設名	実施回数	参加人数
午後の音楽カフェ	せんだんの杜	12回	1,032人
まちの音楽カフェ	せんだんの里	12回	606人
オレンジカフェすまいる	せんだんの館	12回	272人
土曜の音楽カフェ	DCRC	12回	843人
合 計	4ヶ所	48回	2,753人



(6) 国際認知症研究センター構想推進事業

認知症研究に関連する国内外の事例の収集及び調査研究を実施しました。

(7) 認知症施策推進協定会議

協定事項の着実な進捗を図ることを目的に、定例会を開催しています。参加メンバーは、仙台市、大学、認知症介護研究・仙台研修センター、社会福祉法人東北福祉会、医療社団法人東北福祉会、株式会社福祉工房。

昨年度は、年4回（5/12, 9/1, 12/1, 2/7）協定会議を持ち、協定事項の進捗確認、協議、方向性の確認などを行いました。行政と現場、現場と大学、大学と行政との間で協定事項の共有を図れたことは、とても大きな収穫となっています。

IV. 今後の展望

本学と関連法人が協働して現在行っている取り組みを今後も継続していくことが欠かせません。同時に、実施可能な所から確実に事業を広げていく視点を持つことが、展望となると考えています。

たとえば、(1)で触れたことに関連するが、今年度、せんだんホスピタルが認知症疾患医療センターの認定を受けることになり、今後、診断治療等の知見を蓄積することが可能となりました。蓄積された知見やノウハウは、遠くない将来に設立を目指している国際認知症研究センターの機能充実に資することが見込まれるため、その明るい材料となり得るように、知見を蓄積していくことが求められていきます。

次年度は認知症予防対策研究室設置3年目を迎えます。今年度を実施した事業を継続しながら、拡大出来る領域を積極的に展開させていきたいと考えています。

タイトル： 「次世代を担う学生防災士による防災啓蒙教育活動」

部署名： 社会貢献・地域連携センター 防災士研修室

I. 設置背景と目的

東日本大震災を教訓に、被災地の大学では初の防災士養成研修実施法人として防災士養成に取り組む東北福祉大学では、平成 24 年度から福祉やボランティアなど大学の特色を活かした防災士養成講座を開講、学生や一般市民を対象とした次世代の防災人材育成を行い地域防災力向上に貢献してきました。

専門知識を生かした積極的な防災士活動を行うため、2013 年 5 月、防災士資格を取得した学生と教職員 800 名が組織の中心となり、東北福祉大学防災士協議会「Team Bousaisi」を設立。全国的に類をみない規模の大学防災士組織として、宮城県内外をはじめ各地の学校や町内会と連携した総合防災訓練で避難所運営や災害図上訓練の運営支援をするなど積極的な防災啓発活動を行っています。2014 年 3 月、大学の防災士団体としては全国初の NPO 法人格を取得しています。



東北福祉大学防災士協議会「Team Bousaisi」発足式

II. 活動概要

防災士研修室では、以下の 4 点を中心に活動を行ってきました。

1. 防災士養成研修
2. 防災啓蒙教育活動
3. 地域連携活動
4. 広報活動

III. 活動内容（H28年度）

1. 防災士養成研修

本学における防災士養成研修は 3 月、6 月、10 月の 3 回、学内において学生と社会人を対象に実施しているほか、宮城、岩手、山形、福島、茨城各県の自治体と連携し、市民や自治体の防災担当職員等を対象とした防災士養成も行っています。平成 24 年度からこれまでに大学では 14 回、自治体等 25 回の研修開講実績があり、学生 1,900 名、社会人 2,200 名、合わせて 4,100 名の防災士を養成しました。社会人の防災士資格取得者は地域の防災リーダー、企業や社会福祉施設の防災担当、学校教員、自治体職員、マスコミ、消防団員等多岐にわたっており、防災士養成による人材育成は、地域防災力の向上へ繋げる継続的な取り組みとなっています。



大学で開講した防災士養成研修講座



山形県と連携した防災士養成研修講座

2. 次世代を担う学生防災士による防災啓蒙教育活動

次世代への防災人材育成の一環として、小中学校へ出向き児童・生徒への指導も行っています。木町通小学校、仙台第二中学校等からの要請により継続的に実施しています。小中学校における防災教育では、学生防災士が紙芝居やクイズ等の手づくり教材を使い、児童生徒に分りやすい独特な指導方法で高い評価を得ています。児童たちが自分の意見を伝え、仲間と一緒に行動すること、防災の知識を身に付けることはもちろん、他者との情報交換を行い、自らの意思を伝え周りと協力し「自助」「共助」「協働」の大切を知ってもらい「防災力」を向上することを目的とした取組みとなっています。指導にあたった学生からは「防災をテーマとする場合、ゲームやクイズを取り入れた参加型の形で指導すると飽きずに興味を持ってくれるので、最終的に子供達の印象に残るのではないかと感じた」「ほとんどの児童が地震や津波など自然災害が起きたときの対応について自分たちで考えるいい機会になったと思う」などの感想が聞かれました。

また、平成 28 年度は、女性ロックバンド「プリンセス プリンセス」の被災地復興支援寄付金を用いた取組「君とつくる未来～みんなに伝える！えほんプロジェクト」の絵本を製作、タイトルは「輝け☆未来のぼうさいっこ」（A5 版、32 ページ、オールカラー）で 100 部作成しました。これは学生防災士が南三陸町を訪れ、地元の小学生から聞き取りを行い、震災時を振り返った児童の話しとその教訓をまとめた内容となっており、絵本としての完成度も高く新聞、ラジオ等のメディアでも数多く紹介されています。



学生防災士による仙台市立木町通小、仙台二中での防災教育活動



南三陸町の児童たちと交流する学生



完成した絵本を手にする学生防災士

3. 地域連携活動

防災士資格取得後の防災士活動では、学生、教職員が中心となり組織した東北福祉大学防災士協議会「Team Bousaisi」が母体となり、各地の町内会連合会や小中学校等と連携した防災訓練、防災教育指導を通し、次の自然災害への備えを意識した実践的な防災啓蒙活動を行っています。

東北福祉大学「Team Bousaisi」は、地域との交流、小・中学校との連携、災害に強いまちづくり支援等の活動理念に沿った取り組みは、会発足からすでに 250 回以上を数えます。平成 28 年度は宮城県国際化協会外国人対象日本語教室「防災を考える会」で防災指導をはじめ、木町通小学区連合町内会、木町通小、仙台二中と連携した「指定避難所別一斉防災訓練」では学生防災士が地域住民と一緒にテントの設営、応急手当、炊き出し等の訓練指導を含めた支援を行ったほか、木町通小で児童対象に防災授業も担当しました。

このほか、東京ビッグサイトで開催された東日本大震災復興支援を行うイベント「STAND UP SUMMIT 2016」にブース出展、仙台駅帰宅困難者避難誘導訓練、角田市総合防災訓練、ライオンズ定禅寺タワーマンション防災訓練、中山学区総合防災訓練、八幡地区防災訓練、仙台防災未来フォーラムブース出展等 50 件の地域と連携した活動を行いました。このような防災活動は毎月、定例報告会を開催し、参加学生が活動内容や問題点、改善点などを報告、学生同士で情報交換の場を設けています。



青葉区三条町の国際交流会館で行われた外国人避難訓練で活動する学生防災士



中山小学校で行われた中山学区総合防災訓練

平成28年度 防災士活動一覧

- | | |
|--|---------------------|
| ◆4.26 宮城県国際化協会日本語教室防災を考える会 | (仙台市青葉区) |
| ◆5.28 外国人市民のための防災教室 | (仙台市青葉区) |
| ◆6.12 仙台市総合防災訓練 | (仙台市立八幡小学校) |
| ◆6.18 東北福祉大学防災士協議会総会・研修会 | (東北福祉大学仙台駅東口キャンパス) |
| ◆6.19 仙台南ニュータウン防災フォーラム | (仙台市太白区) |
| ◆6.25 木町通学区指定避難所一斉防災訓練 | (仙台市立木町通小学校、第二中学校) |
| ◆8.9 STAND UP SUMMIT 2016 | (東京江東区 東京ビッグサイト) |
| ◆8.9 南三陸町ガイドツアー | (仙台市青葉区) |
| ◆9.2 仙台駅帰宅困難者避難誘導訓練 | (JR仙台駅、地下鉄仙台駅周辺) |
| ◆9.4 角田市総合防災訓練 | (角田市枝野小学校) |
| ◆9.17 中山学区総合防災訓練 | (仙台市立中山小学校) |
| ◆9.21 リエゾンゼミ防災訓練 | (国見キャンパス) |
| ◆10.1 貝ヶ森四町内会避難訓練 | (仙台市青葉区 貝ヶ森小跡) |
| ◆10.22 国見小防災訓練 | (仙台市青葉区) |
| ◆10.22 ライオンズ定禅寺タワー防災講演 | (仙台市青葉区) |
| ◆10.30 くにみ街道まつり | (東北福祉大学ステーションキャンパス) |
| ◆11.13 田子西地区防災訓練 | (仙台市宮城野区) |
| ◆3.12 仙台防災未来フォーラム | (仙台国際センター会議棟) |
| ◆レギュラーラジオ番組の企画・制作 (毎月第一水曜 11:10 から仙台市内コミュニティFMで放送) | |
| ◆NHK ラジオ第一 「ゴジだっちゃ」週刊防災士 毎週木曜 17:21～生放送 | |
| ◆定例活動報告会および活動事前打合せ会 (毎週水曜 17:50 から開催) など 50 件 | |

防災士資格の質をより高めること目的に、青森県防災士会、山形県防災士会と連携し、大学を会場に防災士スキルアップ研修会を開催しました。昨年度に続き、この研修会には学生、社会人防災士ら 50 名が参加、クロスロードゲームなどの研修会を開催しています。



学生と社会人が参加した防災士スキルアップ研修会



仙台防災未来フォーラム会場で活動する学生防災士

4. 広報活動

広報活動として「Team Bousaisi」では、レギュラーラジオ番組を2本担当している。ひとつはNHKラジオ第一の「ゴジだっちゃ」（毎週木曜 17:21 から放送）の「週刊防災士」に学生防災士が週替わりで生出演しています。また、収録番組「ラジオチーム防災士」では、防災意識向上のための啓発活動として「防災士の役割」や「市民向けの防災情報」をテーマに学生が企画・構成、出演し放送しています。番組を通しアナウンスを経験することで、学生防災士の伝達力を養う研修の場ともなっています。番組は、毎月第一水曜の午前11時10分から10分間、仙台市内のコミュニティFM3局（f m いずみ、ラジオ3、エフエムたいはく）で同時放送されています。なお、この番組は無料のインターネットラジオサービス Listen Radio（リスラジ）でも聴取可能です。また、公式フェイスブックでも活動の様子を常に情報発信しています。



学生防災士が生出演するレギュラーラジオ番組（NHK 仙台放送局）

Ⅳ. 今後の展望

大学が行う防災士養成は、防災・減災教育活動の一環であり、次の災害に立ち向う防災の役割と捉え、防災力強化の基礎をつくり、地域の安心・安全につなげる取組みとなっています。また、学生と教職員中心の大学防災士組織をつくり、防災活動を実践したことで、地域、行政、大学との共助体制が確立されました。

特に福祉を学び防災知識や応急手当の技能を身に付けた学生防災士は、要配慮者を災害から守ることができる若い力であり、高齢化する地域住民にとって大きな支援の力でもあります。今後も防災士養成と学生防災士の活動を継続し、地域交流、小・中学校との連携、災害に強いまちづくり支援等の活動理念に基づいた積極的な社会貢献活動を行っていきます。

タイトル：平成 28 年度 地域福祉研究室の活動

部署名：社会貢献・地域連携センター 地域福祉研究室

I. 設置背景と目的

本学の地域福祉研究室は、主として東北における地域福祉の推進を図るための研究活動を展開することを通じて、今後のわが国の地域福祉の推進に寄与することを目的としています。

今、東北は大きな地域課題を抱えており、その地域課題はそれぞれ個別の地域の特徴はあるものの、多くの点で現在わが国が抱えている地域課題と重なります。したがって、東北における取り組みは、それぞれの地域の特徴を基本にしますと、全国の共通した地域課題を解決したり発展させたりする糸口に通じるものと思われます。

II. 活動概要

平成 27 年 4 月に東北福祉大学地域福祉研究センターとして設立され、平成 28 年度の組織改変により、社会貢献・地域連携センター地域福祉研究室として活動しています。

平成 27 年度は、先の東日本大震災の被災地における復興に向けた取り組みに関する研究や介護職員の子育てに関する調査などを実施し、また、災害派遣福祉チーム員養成基礎研修を宮城県と福島県で開催しました。

平成 28 年度は、地域福祉研究室運営委員会の開催に加え、宮城県社会福祉協議会と福島県社会福祉協議会の委託を受けた災害派遣福祉チーム員養成研修の基礎研修を宮城県と福島県で、基礎研修修了者を対象としたスキルアップ I 研修を福島県で開催しました。

※災害派遣福祉チーム員とは…

日頃は福祉施設に勤務している福祉専門職（社会福祉士、介護福祉士、精神保健福祉士、介護支援専門員等。理学療法士、作業療法士、看護師等を含む場合もある）の方に対し、広域災害の際に、知事の命を受けて被災地に派遣され、5 名程度のチームを編成して被災地で福祉的支援活動を行います。被災地では、専門職としての知識や技能に加え、様々なスキルが求められています。

DMAT（Disaster Medical Assistance Team：災害急性期に活動できる機動性を持ったトレーニングを受けた医療チーム）の活動は、報道等で上げられる機会も多く、ご存知の方も多いと思います。これに対し、DCAT（Disaster Care Assistance Team）や DWAT（Disaster Welfare Assistance Team）と呼ばれる災害派遣福祉チームは、主に福祉専門職で構成され、被災地において、複数のチームが引継ぎをしながら、中・長期にわたる福祉的支援活動を行います。

III. 活動内容（H28年度）

1. 地域福祉研究室運営委員会の開催

平成 28 年 6 月 27 日、東北の各県、各県社会福祉協議会から外部委員を迎え、学内委員と共に地域福祉研究室運営委員会を開催しました。その際、4 月 17 日に発生した熊本地震において、発災から派遣までの経過や、派遣先での活動の具体的内容などの報告がありました。

災害派遣福祉チームの活動をより良いものとするために、災害派遣を経験した方からの聞き取り調査や実際に使用されている活動日報の様式などについて考察し、地域福祉研究年報 2016 に報告をまとめました。これらの成果は、各県が策定している災害派遣福祉チーム活動マニュアルにフィードバックされるよう提言して参ります。

2. 災害派遣福祉チーム員養成研修の開催

平成 28 年度は、福島県社会福祉協議会と宮城県社会福祉協議会の委託を受けて、下記の研修を開催しました。

- (1) 福島県災害派遣福祉チーム員養成基礎研修
日 程 平成 28 年 12 月 12 日（月）、13 日（火）
会 場 ラコバ福島 会議室 A・B
修了者 44 名
- (2) 福島県災害派遣福祉チーム員養成スキルアップ I 研修
日 程 平成 28 年 12 月 19 日（月）～21 日（水）
会 場 ラコバ福島 会議室 A・B
修了者 37 名
- (3) 宮城県災害派遣福祉チーム員養成基礎研修
日 程 平成 29 年 2 月 22 日（水）～24 日（金）
会 場 東北福祉大学仙台駅東口キャンパス 54 教室
修了者 49 名

IV. 今後の展望

被災地における災害派遣福祉チームは、災害発生から日に日に変化する状況に対応する能力が求められています。活動の全てをマニュアル化することは困難かも知れませんが、他県から派遣されたチームに引継ぎするケースも考えられます。被災地活動を行う際に想定される様々な状況に対応できる能力を身につけられるような「災害派遣福祉チーム員養成研修」のカリキュラムを開発し、各県に普及させることが、私たちの使命と考えています。

タイトル： 「子ども支援プロジェクト」

部署名： 子ども支援プロジェクト推進委員会

I. 設置背景と目的

東北福祉大学は、ガールズバンド「プリンセス・プリンセス」からの被災地復興支援寄付金（学内に基金を設置）を基に「子ども支援プロジェクト」を立ち上げました。本プロジェクトは、学力の低下や不登校気味になっている子どもたちを見据えて、子どもたちへの支援を継続的に行うことと、人材育成という二本の柱で取り組みを進めていくことを基本方針に、被災した地域や配慮が必要な子どもたちを多面的に支援し、地域の子どもたちに元気を取り戻してもらうとともに、東北の豊かな自然を利用し地域を活かせる人材を育てる（学生のスキルアップ）ことを目的としました。なお、本プロジェクトは平成 26 年度より継続的に実施しています。

II. 活動概要

ガールズバンドである「プリンセス・プリンセス」のプリプリ被災地復興支援寄付金（学内に基金を設置）を基に、東北福祉大学では「子ども支援プロジェクト推進委員会」（以下委員会）を立ち上げ、東北の豊かな自然や、地域の様々な資源を活用して、地域を理解し活かせる人材を育てるとともに、被災した地域の子どもたちや配慮が必要な子どもたちの支援を、平成 26 年度から実施しております。委員会での審議、指導、運営管理のもと、3 回目を迎えた、今年（28 年）度は、これまでの「七ヶ浜での活動」（宮城郡七ヶ浜町）「野々島プロジェクト」（塩竈市浦戸諸島野々島）「学生企画事業」の 3 つのプロジェクトの実施に加え、その他の活動として、JR 常磐線の復旧工事完成記念交流イベント、「防災マップづくり」活動支援を行いました。今年度は子どもたちの支援に、延べ 567 名の本学学生が参加しました。いずれの活動も、地域貢献や支援、学生主体での展開を通して、その経験を卒業後の学校現場や社会生活に活かすことのできる学生を育てることを目指し、実施されました。また、学生企画事業においては自分たちの活動が選ばれることで自己肯定感を高め、学生のやる気と主体性を促進させるとともに実践力アップに繋がるものと考えております。

なお、今年度は「子ども支援プロジェクト」3 年間の活動の総括として、「子ども支援プロジェクト交流イベント」を東北福祉大学仙台駅東口キャンパス（TFU ギャラリーミニモリ）にて開催しました。

III. 活動内容（H28 年度）

(1) 七ヶ浜での活動

大学の特性を生かしたサマースクール（学習会やもの作り教室など）やイベント（表現活動）などの取り組みを、教職員と学生が一体となって行うことを通して、地域の子どもたちに元気とやる気を取り戻す場を提供しています。今年度は 8 月 22、23 日の 2 日間に渡って七ヶ浜町立、亦楽小学校、汐見小学校、松ヶ浜小学校の 3 校でサマースクールを開催し、2 日間あわせて延べ 676 名の児童に参加していただきました。本学からは、延べ 221 名の学生が、学習指導、理科実験の実演、絵画の創作指導などを行いました。また、今年度は昨年度以上に、子どもたち一人一人により手厚く対応できるよう配慮し実施しました。



ガラス容器に思い思いの模様を彫りました。



エピソード作り。モーターでブラシを振動させて動きます。

(2)野々島プロジェクト

豊かな環境の中で自然の素晴らしさを直接感じられる体験や環境づくりの基礎を学ぶなどの取り組みを、塩竈市内の小学生、支援や配慮が必要な子どもたちを対象に、教職員と学生が一体となって行うことを通して、子どもたちに自信と勇気を取り戻す場を提供しています。塩竈市浦戸諸島の野々島において、自然体験型学習（島であそべんちゃー IN 野々島）を開催し、塩竈市内の児童（小学4年生が対象）に参加していただき、思い出に残る楽しい一日を過ごしていただきました。また、初夏の島を歩こう IN 野々島の開催や、ラベンダーの収穫、島民の皆様との交流会などを実施いたしました。



探検隊出発！



みんなで食べるとおいしいね！

(3)学生企画事業

本事業の趣旨に沿った企画を学生自ら立案し、自分たちで実施する「学生企画事業」は、学内公募によって選ばれたサークル、ゼミなどによって事業を実施しています。世代的に子どもたちに目線が近く、また日頃のボランティア等で子どもと接することの多い学生の多様なアイデアを活用し、子ども支援を実践しています。今年度は、七ヶ浜町の小学生を対象に、「ことばの貯金箱」(NIE活動)(三浦ゼミ)、南三陸町の小中学生を対象に、「未来に種をまく～次世代に咲かせよう防災力の花～」(Team Bousaisi)、「渡会ゼミ音楽コンサート in 南三陸」(渡会ゼミ)、仙台市若林区新井、新井東地区の小中学生を対象に、「創作ワークショップ(森ゼミ)」、「簡単楽しいサバメシ作り」(萩野ゼミ)、「かるた教室、かるた大会、ミニ運動会」(ステーションキャンパスクラブ・SCC)、名取市の小学生とその保護者を対象に、「ふぁみりあ被災地子供支援事業」(ふぁみりあ)、山元町では小学生を対象に、「子ども達との絆プロジェクト」(船渡ゼミ)が実施されました。様々な地域で開催された活動はどれも好評で楽しいひと時を提供することが出来ました。



「ことばの貯金箱」の選んだ新聞記事を貼る作業の様子



みんなでモザイクアート！カラフル～

(4)その他の活動

平成 28 年 12 月 10 日、子ども支援プロジェクト委員会が窓口となった、JR 常磐線の復旧工事が完成し運転が再開したことを記念した交流イベントが、「山元町こどもセンター」（山下駅前）で行われました。ボランティア支援した本学学生と地元の子どもたちが、様々な企画を通して充実した時間を過ごしました。また、昨年同様「子ども支援プロジェクト」の一環として、七郷中学校での総合的学習の時間を活用した、「防災マップづくり」活動を支援させていただきました。七郷中の先生方と相談しながら、学内の防災士研修室と連携して、学生の力も活かし進められました。



生徒と学生が街を歩き、防災マップを作りました。



防災士研修室 船渡先生による授業風景。

Ⅳ.「子ども支援プロジェクト交流イベント」の開催

「子ども支援プロジェクト」3年間の活動を総括として、「子ども支援プロジェクト交流イベント」を、平成29年2月11日に東北福祉大学仙台駅東口キャンパス（TFUギャラリーミニモリ）にて開催しました。本イベントは、「学ぶ」「遊ぶ」「楽しむ」の3つの柱を設け、これまでの活動のいくつかのプログラムを子どもたちに体験していただくとともに、活動紹介のパネル展示や、ディスカッションなどを通して、多くの方々に私たちの活動をご理解いただくことを目的に開催いたしました。開催当日は、晴天にも恵まれ、300名近い方がお出で下さいました。



パネルディスカッション



（これまでの活動を振り返るとともに今後の活動の在り方について学生目線で討論しました）

交流イベントチラシ



交流イベント来場者